ケイコ始め

學習態度の基礎が出來上つたら、いよ／＼教科指導に取りかゝらなければならない。

教科の指導といつても、いきなり教科書を取扱ふことは考へ物である。

環境の整理といふことが大切であつて、子供達の思考することを、出來るだけ統一してバラ／＼になつてゐる心を、一つの中心にたぐり集めて教場の空氣をまとめなければならない。

子供達は大抵、父兄の單なる欲望に任せて教へこむに過ぎない「讀む」とか「書く」とかのことを一生懸命になつてやつて來る。

そのために、多くの子供は讀方なども一通り暗誦出來るやうになつて來てゐるので

ある。「讀む」といふよりは、寧ろ鵜呑みに暗誦してゐるのであるから、一字一字を明確に解つて、讀むのではなく、うはの空で、機械的に唱へるに過ぎない場合がある。

いつしよに讀ませるときに、よく見受けることであるが、今讀んでゐる所とは違つた頁を開いて、然も皆と同じことを唱へてゐる子供がゐる。

わき見をしながらも唱へてゐるし、本がなくとも唱へられるのである。

之は決して「讀む」のではなく、「唱へる」のである。

「カズノホン」を取扱ふ場合にも、最初は事物の個數の數へ方や、事物の順序の數へ方數字の書方などを指導して、空間の觀念や、時間の觀念、統計理念などの芽生えを養ふわけであるが、一番基礎は、數の數へ方から入る。

ところが子供達は、數の「唱へ方」は十までは勿論、二十までも、五十までも、中には百、千……等までも唱へる者もある。

「唱へる」ことは幾つまで唱へてもよいのであるが、機械的な唱へ方であつてはなら

ない。

ヒトツ、フタツ、ミツツ、ヨツツ、イツツ、ムツツ、ナナツ、ヤツツ、ココノツ、トヲと唱へたり、イチ、ニ、サン、シ、ゴ、ロク、シチ、ハチ、ク、ジフなどと唱へさせたり、又、ヒ、フ、ミ、ヨ……などと唱へたりする。

このやうな唱へ方も、歌の文句や、イロハを暗誦するやうなことに終つてはならないのであつて、常に數觀念の實質的な內容と結びついた、數詞の唱へ方でなければならない。

そのためには、數へることや、數詞を唱へることや、數字を讀むことや書くことなどの働きを、バラ〳〵に取扱はずに、全體として一つになるやうに指導せねばならないのである。

入學前に家庭で敎へこむのは、私達の立場から言へば、決して喜ばしいことではなく、却つて困ることさへあるのである。

最初から秩序立つて敎へられるならよいのであるが、「カズノホン」の指導といへば、數を唱へ、數學を書くことだとばかり考へられて、目茶目茶に敎へこまれると、數觀念の秩序が亂れて、ホト〳〵弱らせられるのである。

集合數も順序數も同じやうに、數へればよいと思ひこんで敎へられると、それを再び燒直すことは容易なことではない。

一度間違つて敎へたことを正すのには、倍以上の努力を拂はねばならないのであつて、總べて物事の始めが大切であるといはれるのにはかうした理由がある。

「唱へ方」の指導は、唯數を數へるといふだけではなく、人を數へさせたり、鉛筆を數へさせたり、石や木や紙や馬、牛……等子供達の生活の中から取出して、なるべく原形に近い唱へ方と結びつく、單位名から、先に取扱ふことが順序である。

ヒトリ、フタリ、サンニンとか、一ボン、二ホン、三ボンとか、イッセン、ニセン

サンセンとか、イチマイ、ニマイ、サンマイなどといふやうに、事物を結びつけて數へさせると、數觀念としての、集合數や順序數も、具體的に理解されて來るのである。

從つて、學習の當初に當つて、心を配らなければならないことは、既に子供達が收得してゐる知識の整理をして、秩序立ててやることが大切で、何の準備もなくして、直ちに指導を進めたなら、子供達は、思ひ思ひの考への上に立つて、勝手な軌道を走つて行くことになる。

地ならしをして、土臺をしつかり固めなければ、決して建築が出來ないやうに、教育のことも、木の根を起し、石をとり、高低をなくして平面とし、其の上に、がつちりした家を建てることなのである。

國民學校の教科書は、昔のやうな、分科された編纂ではなくて、總べての教科は關聯し、交錯して、讀方は讀方だけ、音樂は音樂だけといふやうな行き方ではなく、どの教科も一度取扱へば、それは「ヨイコドモ」でも「ヨミカタ」でも「ヱノホン」でも

「コウサク」でも「タイソウ」でも、連關して取扱ふやうに仕組まれてゐるのである。

「ヨミカタ」の第一頁には櫻の花が爛漫と咲き誇つてゐる校庭で、全校の兒童が、朝のラジオ體操をしてゐる繪がある。

話し方も、讀み方も、未分化にある兒童には、子供達の實際の經驗や見聞と、結びつけて此の繪を中心に、いろ〳〵な、お話し合ひをさせ、入學の喜びや、春の樂しさ花の美しさ、元氣で朗らかな、ラジオ體操などの話し合ひをする。子供達は自然に、「一二三四五六七八」と呼稱をつけて、體操を始めるであらう。

四拍子のリズムは、リズムの持つ快感にひたらせて、或は大きく叫び、或は小さく叫び、段々調子づいて來るであらう。

讀み方が體操にうつり、體操はやがて、數を唱へて「カズノホン」の取扱ひになり、話し合ひを通して、發音の指導も行はれ、それが、樂しい音樂にまで及ぶといふやうに、どの教科も、單一的なものではなく、相互に交錯して取扱はれるのである。

總べての教科書は、入學最初の一週間に於ける、躾の實踐を基礎に、編纂されてゐるので、今まで子供達が行つて來たことが、そのまゝ、お教室でも教はるやうな仕組みとなつてゐる。「ヨイコドモ」には「ガクカウ」が現れて來る。

自分達が入學した學校の樣子と同じやうな繪がある。大人が見れば學校の造りや設備が違つてゐるので、自分の學校とは思はれないが、子供達にとつては、挿繪の學校は、皆自分達の學校と思つてゐるのである。

入學といふことは、子供にとつては生まれて始めての經驗で、總べての物は皆珍しく見える。

その珍しさ、喜ばしさのうちに、學校生活についての、適當な心構へをよび起し、それに、そうやうな態度を、とるやうにしなければならない。

子供達は入學式も終り、學校も案内され、上級生にも紹介されて、生活の基礎も出來て來たのであるから、それを實踐するやうな指導が、行はれなければならない。

入學の喜びに包ませながら、次第に學校生活に慣れさせて、學校は、自分達を立派な國民に育て上げるために、設けられた所であることや、「ヨイコドモ」になるための所であることを、しつかり敎へて、學校に親しみを持ち、學校を尊び、喜んで學校に來るやうに導くのである。

「ヨイコドモ」になるためには、身體を丈夫にして、よく課業に勵まねばならぬことを、しらせなければならない。

やがて子供達の生活は、豫習や復習や練習などの知識の習得から、整理整頓、自然の觀察により、動植物の飼育栽培などの、いろ〳〵な作業に發展し、遊戯、食事、休憩、話し合ひなどの生活に及び、ラジオ體操、朝會、學藝會、音樂會、運動會、遠足などの行事、祝祭日などの儀式にまで、關聯して來るのである。

教科書の挿繪を中心にして、學習を進めて行けば、子供達の心の中には、過去一週間の生活が、強く思ひ起されて來るであらう。

それ等の一つ一つが、皆自分達の生活の基礎となり、糧となつて、しつかりと自分の身體について來てゐることを、知ることが出來るのである。

學習の事始めに當つては、子供達の面前にくりひろげられた、學校生活の全體を、各教科書を通じ、統一してやらねばならない。

教室點描

ヨイコドモとヨミカタ

「ヨイコドモ」のおけいこの時である。

「皆さんはどうして學校へ上がつたのですか。」

と尋ねて見た。

「オカアサンガイツタカラデス。」

「ガクカウハオモシロイカラデス。」

「オトモダチガタクサンヰルカラデス。」

「イロンナコトヲオボエルタメデス。」

などと、様々なお答へが出て來た。子供達には、どれも皆眞實な答へなのである。學校生活を、それ〳〵部分的に捉らへて、學校への親しみと、喜びとを心にこめた答へである。

私はこれらの答へを皆とりあげて學校生活の一日に織り込みながら話をしてみた。すると、

「ヨイコドモニナルタメデス。」

と答へた者がゐる。

「大そうよい所に氣がつきましたね。皆さんは誰れでも、「ヨイコドモ」になるために學校へ上がつたのですよ。」

とまとめておいた。

それから、子供達の頭の中には、すつかり「ヨイコドモ」といふことがしみこんだらしい。「ヨイコドモ」になるには、どうしたらなれるでせう。」

と一歩切りこんでみると、仲々面白い答へが出て來る。

「センセイノイフコトヲキキマス。」

「オトウサンヤ、オカアサンノイヒツケヲマモリマス。」

「アイサツヲシマス。」

「ミズヲコボシマセン。」

これは、且つて水道の栓をよくしめておくことを話したが、この子供には、餘程強く心に殘つてゐた爲であらう。

子供達の答へは、敎師の問ひが何であらうとも、自分の心に最も強く殘つてゐたものを、一番最初に發表する。

「アサネバウヲシマセン。」

「オカネヲツカヒマセン。」

「ナキマセン。」

などと答へる。子供達は、今まで自分がやつたことを、正直に發表してゐるのである。

朝寢をしてゐた子供や、お金を使つてゐた子供、よく泣いた子供は、さうしたことをやらないことが、「ヨイコドモ」となるのだといふことを、よく知つてゐるのである。

「君は、今まで朝寢をしてゐたのですね。朝寢をしたり、お金を使つたり、泣いたりすることは善くありませんよ。」

などと言つたら、子供達はきつと、

「オヤオヤ、ホンタウノコトハイハレナイゾ。」とそれ以來うそをつくことを覺えるであらう。折角舊惡を暴露して、賞めて貰ふと思つた子供達は、目算がはづれて裏切られた氣を抱くであらう。

過去のことを、いくら兎や角言つて見ても、仕方のないことで、それよりも、寧ろ積極的に、善いことを實行するやうに、仕向けて行くことの方が大切なのである。

「それはよいことに氣がつきました。今まで泣いたことのある人も、之から泣かなくなれば、「ヨイコドモ」になれるのです。」

と引立ててやつたら、其の子供は、救はれたやうな喜びを感ずるであらう。

それから、私は子供達のお答へを中心にして、朝起きてから、寢るまでの生活を、一つのお話にまとめて行つた。

挨拶のことも、學校のきまりのことも、お行儀のことも語り合つたのである。

「さあ、「ヨイコドモ」になりませう。」

といふと、子供達は皆姿勢を正して、天井をみつめるのである。

「御挨拶のおけいこをしませう。朝起きたら何と言ひますか。」

「オハヤウゴザイマス。」

「どなたに言ふのですか。」

「オトウサントオカアサンデス。」

「それだけですか。」

「オヂイサンニモ、オバアサンニモシマス。」

「さうです。大人の人には皆御挨拶しませうね。」

と言ふと、

「オトナリノヲヂサンニモシマス。」

「オニイサンニモ、オネエサンニモシマス。」

と答へる者も出て來る。今度は、一人一人に言はせて見ることにした。

「元康君、言つてごらんなさい。」

「オトウサンオハヤウゴザイマス。オカアサンオハヤウゴザイマス。」

と元氣よく大きな聲で言ふ。

「光子さん、言つてごらんなさい。」
「オトウサンオハヤウゴザイマス、オカアサンオハヤウゴザイマス。」
「少し聲が小さいですね。お父さんもお母さんも聞えませんよ。」
と言ふと、きまり惡いやうな様子で、少し大きな聲になる。
「ごはんをいたゞく時は何と言ひますか。」
「イタダキマス。」
皆一しよに答へる。妙な調子をつけて言ふ。
「歌を歌つてゐるやうですね。」
子供達は笑ひ出す。
「芳子さん、言つてごらんなさい。」
「イタダキマス。」
「大變よく出來ます。こんどは食べ終つたら何と言ひますか。」

「ゴツゾウサマ。」
「少し變ですね。まだごはんが、お口の中に入つてゐるやうな言ひ方ですよ。」
「ゴチソウサマデス。ゴチソウサマデス。」
と五六人が先を爭つて答へる。
「さうです。ゴチソウサマデスよ。ゴツゾウサマはおかしいでせう。」
子供達も、おかしい言ひ方であることが解つたと見え、お隣や後のものと話し合ひが始まる。

この話し合ひを私は止めなかつた。自分達の答へ方の惡るかつたことが解つて、お互に注意し合ふ、所謂相互研究の會が、期せずして催されたのである。違つて答へた者に、注意を與へてゐる子供も居る。このやうなお互の話し合ひは、充分見守つてやらせなければならない。
「キミノイフノハチガツタヨ。」

「カヅコサン、チガフワヨ。」
などと、お互に注意し合ふ中に、めい／＼が、育つて行くことを考へなければならないのである。そして其の話し合ひは、私が止めなくとも、いつの間にか自然と靜まつて來て、次の私の問ひに、耳を傾けるやうになるのである。
「センセイ、タカチヤンハ、オハヤウゴザイマスヲイヒマセン。」
などと、素破抜くものもゐる。
　調べて見ると、本當に言はなかつたらしい。私はその子供を指名して言はせて見る。
「孝君、言つてごらんなさい。」
孝君はきまり惡るさうな態度で、まはりのお友達の顔を、一つ一つ見ながら
「オトウサンオハヤウゴザイマス。オカアサンオハヤウゴザイマス。イタダキマス。ゴツゾウサマ。」
　外の子供達は、一齊に笑ひ出してしまつた。

「笑つてはいけませんね。孝君はよく答へられましたよ。」
「センセイ、チガヒマス、チガヒマス。」
「ゴツゾウサマツテイヒマシタ。」
「ゴツゾウサマハイケマセン。」
「マチガヒデス、マチガヒデス。」
孝君はベソをかいて中腰でゐる。
「孝君、どこか違つたやうですね。」
と私が言ふと、孝君のまはりの子供達が敎へ始める。
「ゴチソウサマヨ。」
「ゴチソウサマダヨ。」
「ゴチソウサマツテ、イヒナア。」
などと、ガヤ／＼言ひ出すのである。これでは、どんな子供でも、二度と違ふわけに

は行かないし、うつかり出來ないぞと考へる。孝君は、遂に立往生をしてしまつたのである。

○

昇君はへうきん者で、時々滑稽なことをしたり、言つたりして、お友達を笑はせるのである。昇君の顔は、いつも朗らかで罪がない。顔を見ただけでも、愉快になる存在である。

私が教室へ入らうとすると、中からどつと笑ひ聲が起つて來た。何事だらうと、足を止めて窓越に覗くと、へうきん者の昇君が、教壇に立つて、私の眞似をしてゐるのである。

「ミナサン、オハヤウゴザイマスツテイヒナサイ。」

と言ひながら、背伸びして、教卓によりかゝつてゐる。外の子供達は、笑つて手を叩いてゐるばかりで、誰も命令に服從しない。

「ダメダヨ、イハナクチヤ。」

此の先生、少しいら〳〵して來たらしい。教卓を叩いて怒り出した。私はその時、

「センセイ、オハヤウゴザイマス。」

と言ひながら、入つて行つたら、昇君は、急に眞赤な顔になつて、引き退つてしまつた。自分のお座へ歸ると、机の下にもぐつて、なかなか出て來ない。

「昇君、もういゝかい。」

とからかふと、外の子供達も皆一しよになつて、

「モウイイカイ、モウイイカイ。」

とはやしかける。昇君は、さつきの恥しさが消えてしまつたのか、カクレンボの境地に入つてしまつたのか、平氣で、

「マアダダヨ。」

などと言つて、濟ましてゐるのである。此の昇君に、ヨミカタのおけいこの時「ヘイ

タイサン」のところを讀ませて見た。
「ヘイタイサン、ススメ　ススメ、トタテツテテタテタ。」
と本の上から顏を出して讀んでゐる。
「トタテツテタテタは、おかしいですね、兵隊さんの足が揃ひませんよ。」
と私が注意をすると、
「ヘイタイサンノラッパガナイカラデス。」
と眞面目な顏をして答へる。
「なるほど、ラッパがなかつたですね。それでは、ラッパを貸してあげますよ。」
と私はこぶしを握つて、口元に當てて見せた。子供達は、皆眞似をして、こぶしを口元に當てがつた。昇君が、
「ダイヨウシンノラッパダヨ。」
と言つたので笑ひ出してしまつた。昇君はなかなか氣轉も利くし、常識も進んでゐ

る。商店街の子供に、多く見る傾向である。靜まるのを待つて、私は調子をつけて吹き出した。
「チテ　チテ　ター　トタ　テテ　タテター　チテ　チテ　ター　トタ　テテ　タテター。」
最初は高く、二度目は低く。子供達はすつかり調子づいて、ぐる〳〵まはりながら、吹くものもあるし、足踏みをしてゐるもの、歩き出すもの、俄然教室は、練兵場と變つてしまつた。節をつけて言はせると、
「トタテツテテタテタ。」
などといふものは一人もなくなる。
子供達は、ラッパを吹きながら、遂に運動場へ繰り出してしまつた。女の子達も、眞面目に吹きながら續いて行つた。

ウタノオケイコと軍歌

新しい音樂の特徴は、和音による聽覺訓練の實施であるといはれてゐるが、音樂に對して、素人の私達は、絶對音感の敎育には、事實参つてゐるのである。

專科の仕事を、專科を對象として、要求されてゐる音樂教育の重點を、一般の訓導が引受けてやらねばならないのであるから、その指導には隨分困難な點が多い。

ドレミハソラシドで讀んだ本譜を、1234567の數字に飜譯して、苦心慘憺覺えた私達である。

それが、和音名のイロハニホヘトに變つてしまつた。そして、依然としてオタマジヤクシは、讀みこなせないのである。音階がはつきりしない私達には、ドレミハソラシドが、イロハニホヘトの和音名に變つても、大した影響がないのである。

國民學校の一年生に於ては、ハホト、ハヘイ、ロニトの三つの和音を、オルガンや

ピアノによつて、和音や音高を記憶させなければならないのである。私達は、舊體制時代の音樂を、然も二十年も前に習つたきりで、爾來樂器に觸れる機會は、絶無であつたのである。

それが全くの一年生となつて、音樂名ハホトからやり出すのであるから、人知れず苦心がいる。

「ウタノホン」のおけいこの時である。

ハホトの音名を敎へて、オルガンの音を聞かせながら判斷させるのである。

昔の「ド」の音をビーと彈いて、「これが『ハ』の音ですよ。」

「ミ」の音をブーと彈いて、

「『ホ』ですよ」

「ソ」の音をブーと彈いて、」

「『ト』の音です。」

などと何回も何回も繰り返して練習してゐた。」
「ハの音は『ハト』と呼びませう。」
「ホの音は『ホタル』と呼びませう。」
「トの音は『トンボ』と呼びませう。」
などとも敎へて見た。
もう大丈夫だらうと思つて、ハの音をプーと彈いて、
「何の音ですか。」
と聞いたら
「ハト、デス。」
と答へたから、私は内心ホク／＼喜んで、
「さうです、さうです。皆さんはよく解りますね。さあ今度は。」
と、ホの音をプーと彈いた。

「ハト、デス。」
と答へた。私は
「えゝ？」
とわざと、驚いたやうな顔をしてみせると、今度は大勢が一所に、
「ホタル、デス。」
「トンボ、デス。」
「ハト、デス。」
私はしばらく默つてゐた。
「ホタル・デス。」
「トンボ・デス。」
「ハト・デス。」
と急に秩序がなくなつて、ガヤ／＼と雜音に變つて來た。私は二度と彈く氣力がなく

なつて、呆然としてしまつた。
「センセイ、ハトノウタヨリモ、グンカガイイデス。」
　他の子供達も一齊に
「センセイ、グンカガイイデス。トンボノウタハ、オモシロクナイデス。」
「アイコクカウシンキョクガイイデス。」
「アイバシングンカガイイデス。」
　嗚呼、私はいよ〳〵彈くことが出來なくなつてしまつた。
　いや眞實、軍歌などは餘り歌ふ機會もないのであるから、勿論オルガンで彈くこと
などは、且つてなかつたわけである。
「そんなに騒いでは、オルガンを彈いても聞えないでせう。」
といひながら、ハホトの音を、何度もブーブーブー彈いたら、急に靜かになつた。
「それでは、愛國行進曲を皆と一所に歌ひませう。」

私は先に歌ひ出した。勿論オルガンは鳴らないのである。

見よ　東海の　空あけて
　旭日　高くかゞやけば
天地の正氣　はつらつと
　希望はをどる　大八洲
おゝ　せいらうの　朝雲に
　そびゆる　富士のすがたこそ
きんおうむけつ　ゆるぎなき
　わが日本の　ほこりなれ

子供も後から追ひつきながら歌ひ續けたが、本當に知つてゐるものは、極く少數であつた。
　子供は大抵、歌の題目か、一番位の歌しか覺えてゐないのである。

私のどぎもを最初に抜いた軍歌、子供だつて大して知つてはゐない。自信のなかつた私は、軍歌などと言はれて、すつかり上つてしまつたのである。此の時局に、せめて軍歌や愛國歌位は、どれも自由に彈けるやうになつてゐなければならないと思つた。

私は、それから一週間夢中になつて、軍歌や愛國歌の猛練習を展開した。調子のはづれたオルガンの音が、私の教室から方々の教室へ物凄くなだれ込んだのである。子供達の「ウタノオケイコ」は、實は私の「ウタノオケイコ」になつてしまつたのである。

絶對音感の教育は必要であるが、私達の絶對音感教育を一體どうするか。」

春の種まき

四月の自然の觀察では「學校の庭」や「入學記念の木」や「庭の花」「庭の動物」など主として學校の内部の自然物について觀察させ、木や草に親しみを持たせて來たのであるが、草や木の中にひそんでゐる、生命の力を強く感ずる機會は少なかつた。

私達は五月の教材として「春の種まき」の課で、アサガホの種を蒔いて土に親しませ、種が芽生えて、大地に育くまれ、伸びて行く姿を眺めさせて自然の生命の力を感じさせ、愛育の喜びにひたらせ、種まきの方法の初歩を指導することにした。

最も最初は、「種まき」だけで後は其の變化を觀察させるのである。

割當てられた學校園を三學級に分けて植ゑさせることにした。狹い所で六十名の分を植ゑさせるには困難なので、代表的に植ゑさせ、後は植木鉢を持參せしめて各自に

植ゑさせることにした。

當日は教室の前に名札をつけた植木鉢を並べさせ、その前に一人づつ立たせておいて、種を三粒づつ配つた。

八分目まで土を盛つた植木鉢に種をまかせた。私は説明しながら、人差指で穴をあけ、一粒づつ種を入れて土をかけて見せた。

子供達も皆眞似をしてまき始めた。私はその前を巡視して指導して行つた。

全部まき終へた頃を見計らつて如露で水をかけさせた。子供達は皆、如露で水をかけたがつて爭つた。私は當番を作つて、毎日水をかけさせることにしてやつと落つかせた。

「皆さん、上手に種まきが出來ましたね。きつと元氣のよい芽が出て來ますよ。いつ頃出るか氣をつけておきませう。鉢の中が乾いてゐたら、當番の人は忘れずに、水をかけてやつて下さい。」と注意したり、賞めたりしておいた。

子供達は樂しみが一つ增したので、大變な騷ぎである。毎日毎日私の所には引きもきらずに注進が來る。

「センセイ、ボクノハマダメガデマセン。」

「センセイ、ワタシノチツトモメガデマセン、タネガシンデシマツタデスカ。」

などと面白い質問も出て來る。昨日まいたばかりで芽の出ないことを心配してゐる子供達である。

子供達は毎朝「奉安殿」に最敬禮を濟ませると、アサガホを見るのが日課になつてしまつた。その度に

「センセイ、メガデマセン。」

と注進に及ぶ。

私は四五日經つた時、鉢の土に割れ目が出來てゐないかどうかを、注意して見るやうに話をしておいたのである。

それから八日目であつた。
「センセイ、ボクノメガデマシタ。」
と元康君が鬼の首でも取つたやうな勢ひで、鉢を持つて飛んで來た。
「どれ〱、ほほう、本當に芽が出ましたね。土が割れて其の間から兩手を合はせたやうな形で芽が出てゐますね。」
と私は他の子供達にも見せてやつた。他の子供達も皆大急ぎで自分の鉢を見に出かけて行つた。他にも二三人芽の出たのがあつた。まだ出ない子供達は汽車に乗り遅れたやうな顔つきで、めい〱の鉢の前に立つてゐる。

毎日毎日、十四五人宛芽の出たことを報告して來た。十二三日經つた頃には殆ど皆芽が出揃つてしまつた。

生きてゐるとはどうしても考へられなかつたアサガホの種をまいたら、不思議な形をした芽が土をもたげて出て來たのだから、子供達は驚いてしまつたのである。更に

芽が太陽の光と水とによつて大きく育ち、葉を出し、つるをのばして、蕾をもち、花を咲かせるやうになつたら、どんなにか驚き且つ喜ぶことであらう。

子供達は、自然に太陽と大地の惠みを強く感じ、感謝の氣持を沸き起すであらう。

子供達のまいたアサガホの種は、

八日目	三人
九日目	十五人
十日目	十三人
十一日目	十六人
十二日目	六人
十三日目	七人

といふ様な工合で芽を出した。それから芽の變化や、葉の出る様子を注意して見るやうに話してから、一本を殘して他の二本は自分の家の庭に植ゑるやうに持たせてやつ

た。
軈て毎日のまごころこめた手入によつて、葉もよく出たのであつたが、學校に飼つた雛が出て來て、折角丹精こらして育てた子供達の朝顔の芽を、食べてしまつた。それを見つけた五六名の子供達が、一度に泣き出されたのには、私もホト／＼困つてしまつたのである。私は其の日の夕刻、子供には默つてそうつと朝顔の芽を植ゑておいてやつた。

子供達は翌日不思議な顔をして私の所に「メガデマシタ」と報告して來た。

體操と遊戯

子供達はカケツコが大好きである。運動場に出ると

「センセイ、カケツコサセテクダサイ。」

と注文をして來る。

「センセイ、ヨーイ、ドンシマセウ。」

とねだりに來る。

何回やつても疲れを知らないのである。

「もうたくさんでせう。」

と言つてもきかない。

私が眞先になつて「先生の後について來なさい。」

と運動場の廻りを巡ると、ワーッと叫んで大勢が我先きにと驅け出して來る。そしてどんどん私を追ひ越して驅けて行くのである。

「先へ行つてはいけません。」

と言つても、なかなか言ふことを聞かずに先へ先へと進んで、

「バンザーイ」

などと得意になる。
「今度は體操をしませう。」
と言ひながら、私を中心としてまはりに集めると、皆爭つて私にしがみついて來る。
「そんなに集つては體操出來ませんよ。」
と言ひながら、私は手と足の運動をやつてみせると、皆一齊に眞似をしてキャツキャツと喜ぶ。
「さあ、今度は飛行機ですよ。」
私はブルブル口唇を動かして、兩手を擧げぐる〳〵廻り始める。子供達は大喜びでまはり始めた。
ブルブルブルブル、運動場は時ならぬ飛行機の爆音で一杯になつてしまつた。
「ショウトツ、ショウトツ。」
子供達は手と手が觸れると叫び合つて離れて行く。その中一人の子供は、

「カシムラキダョ、カタハイキダョ。」
と片手を下ろしてブルブル言ひながら飛んでゐる。
なかなか面白いことをやる子供もゐるなあと感心してしまつた。
「先生は部隊長機だよ。後に三機編隊で續いて來ーい。」
と命令を下して驅け出して行くと、感心に一人が前、二人が後に三角形を保つて飛んで來た。私は得意になつて續け續けと一廻りして來ると、二人の子供がベソを掻いて將に泣かんばかりである。
「君等二人は連絡機だから二人でいいよ。」
と大聲で言ふと、泣き顔が急に笑ひ顔に變つたので顔をくしや〳〵にして、それでも泣き聲まじりでブルブル言ひながら續いて行つた。
「今度はボート、レースだ。」
子供達を四列に列べて運動場に腰を下ろさせ、脚を揃へて前方に出させ、ボート、レ

ースの姿勢をとらせた。

「用意！　ドーン。」

「オー、エス、オー、エス。」

子供達は氣合を掛けて漕ぎ出した。ボート、レースを見たことのない子供も、一かどの選手のやうな顔をして眞赤になつてがんばつてゐる。

どの列も皆一生懸命にやつてゐるので、順位をつけることが出來ないから、皆一等にして萬歳をさせた。

子供達は餘り嬉しさうでもなかつた樣子。矢張り順位をつけた方がよかつたのかも知れない。

此の頃は朝會の體操も、順序や形だけは一通り呑みこんで來たやうである。そこで一つ一つの敎材の徹底を圖るべく練習を始めた。號令の約束などもした。

私が號令を掛けると、一人の子供が、

「ボクニモカケサセテクダサイ。」

と言つて來た。私は號令を掛けることは、

「ヨミカタ」の「キヲツケ」にもあることだから、

「よし、よし、やつてごらん。」

と喜んでやらせることにした。

なか／＼キビキビした聲を出す田中君である。

許された田中君は大きな目玉をグリ／＼させて、部隊長になつた樣な得意さで皆の前に立つた。

「キヲツケー。」

「ミギエーナラエ。」

「ナオレ。」

「バンゴー。」

「イチ、ニ、サン、シ、ゴ、ロク。」
と他の子供達は一齊に唱へたので、田中君は益々得意になつてしまつた。そして遂に
「ヨミカタ」にない號令までかけてしまつたのである。
「マヘーへ、ススメ。」
號令を掛けられた他の子供達は、
「イチ、ニ、イチ、ニ」
と呼稱をつけて、前に進んで行つた。田中君は後から
「イチ、ニ、イチ、ニ。」
と矢張り他の子供達と一所について行つた。
　私はどうなることかと見送つてゐると、子供達は凸凹の列になつて、それでも
「イチ、ニ、イチ、ニ。」
と元氣のよい聲で歩いて行つた。

　田中君は大きな目玉を益々大きくして、私の所に飛んで來た、
「センセイ、トマリマセン。」
子供達は四年の敎室の前で足踏みをしながらそれでもまだ、
「イチ、ニ、イチ、ニ。」
を繰りかへしてゐる。
「全體、止まれ。」
「イチ、ニ。」
と元氣のよい呼稱をつけて子供達はやつと止まつた。
　田中君は頭をかきながら子供達の列の中へ入つてしまつた。

強い子供

四月の下旬から五月の上旬にかけて行はれる身體檢査は、學校にとつては大事な行事の一つである。

內科、眼科、齒科、耳鼻咽喉科等の專門醫の檢査を始め、身長、體重、胸圍、座高まで測定して、子供達の健康狀態を判定するのである。

前後二週間もかけて檢査測定する此の身體檢査は、私達の立派な教育資料として活用しなければならないものである。

私達の場合は單に檢査や測定をすればよいと言ふばかりではなく、その前後を通じて今まで訓練して來た躾や禮法作法を、かうした機會を通じて實踐せしめることや、子供達の性質等を觀察したり、結果の處置を講じたり容易ならざる問題を含んでゐる

のである。

洋服を脫がせたり着せたり、子供達の管理から、調査票の作成檢査の補助や測定をしたり、その記入から、統計まで全く身體が二つあつても三つあつても尙足りない有樣である。

今日はその身體檢査で、專門醫の診察日である。

私は豫め前日から種々な注意をして置いた。

入浴をしておくことや、耳の穴の掃除をしておくことや、お醫者樣の前に行つたらおじぎをすることなどこま〲とお話をしたのである。

當日は朝から開始された。

先づ最初は男の方に檢査票を渡して衞生室へ連れて行つた。女の子の方には作業を與へて、靜肅に勉强をしてゐるやうに注意した。

二十八名の男の子は、これから何をされるだらうと不安な氣持で、めい〲檢査票

を持つて二列に列んでゐる。
出席簿の順に私は一々名前を呼んでやると子供達は
「ハイ」
と返事をしながら校醫の前に立つておじぎをする。
聽心器を胸や背中に當てられて診察されると、子供達は非常に緊張して身體をこはばらせてゐる。
内科の方を終ると耳鼻咽喉科の方に廻り、齒科の方に行くといふやうに順々に檢査を受けて行く。
心配した程もなく子供達は靜肅であつたが、敎室に殘した女の子の方は騷々しくなつた。私は一寸行つて覗いて見ると、もう出來てしまつた子供達は、五六人かたまつて遊んでゐる。
「「ヨミカタ」の書き取りでもしなさい。」

と仕事を與へて又衞生室に入ると、今度は男の子の方がキヤツ〳〵と騷ぎ始めた。裸體になつたので、くすぐりを始めるいたづらものが現れたのである。
「クスグツタイヨ。」
「イヤダヨ、イヤダヨ。」
キヤツ〳〵ガヤ〳〵わめき出したのである。
「いけませんよ、靜かにしないとお醫者樣がよく見られませんからね。」
とすかしてみたが、その時は靜まるが、又少し立つとボソ〳〵始める。
終つてしまつた子供は、仕方がないので運動場に出して遊ばせておくと、
「センセイ、ヨシアキクンガ、スベリダイニノツカリマシタ。」
などと報告に來る。
「大人しく砂場で遊んでゐなさい。」
と注意を與へておいたが心配である。一つの心が、敎室へ、運動場へ、そして目前の

子達へと三つにも散らばつて行かなければならない。
　訓練の基礎が出來たと思つても、入學して僅か二、三週間である。その管理は仲々容易ではない。
　返事やおじぎはきちんとするが、何か興味のある仕事を與へられない子供達は、寸時も靜止してゐることは出來ないのである。
　目を、手を、足をじつとさせておくことは困難なのである。
　習ひ覺えた「コクミンガクカウ」の唱歌を歌ひ出すものがある。それに引づられて「隣組の歌」を歌ふものもゐる。
　校醫の先生達も笑つてゐられる。罪のない子供達のしぐさを見てゐると、ふりあげたこぶしのやり場に困るやうなことがある。
　然しかうした機會こそ錬成の時である。私はそこで種々と注意を與へたり、おじぎのしかたの惡い子供達にはやりなほしをさせたり、おしやべりする子供には、うるさ

くすると、他の人達に迷惑をかけることなどを話してやると流石の腕白連中も、よく解つてくれたと見えて靜かになつて來た。
　男の方が終ると今度は女の方である。かういふ場合、女の子は管理し易いもので、靜粛である。
　そこで私は運動場に散つて遊んでゐる子供達を呼び集めて、敎室へ入れ洋服を着せた。感心なことに、今までの一年生と違つて、大抵の子供は殆ど自分でちやんと洋服を着てしまつた。
　然し中に五六名は、シヤツを裏返へしに着たり、パンツをはかずにずぼんをはいてしまつたりする者もあつた。
　それでも注意をされただけで、自分で着てしまつたのである。
　洋服を脱いだ時、よく疊んで腰掛けの上におくことを敎へたら、子供達は一生懸命になつて、丁寧にたゝみ、靴下までたゝんだのには思はず笑はされてしまつた。

大抵のことは自分でやれるのである。やらせるやうに仕向けることが大切であるしそれを指導しなければならない。

一週間ばかり經つてから又測定を始めることになつた。これは子供達の身長、體重胸圍、座高を測るのである。

衛生婦と私達學年の者と協力して、測定したり、記入をしたり、管理をしたりする。身長測定器、體重測量器、座高測定器等を準備した。

衛生室へ今度は男も女も一所に連れて來た。

器械について説明をしたり、器械をどういふやうに使ふか、測つて貰ふのにはどんなことをするかなど、子供を使つて一つ一つ實際にやつて見本を示して敎へた。

身長を測つたら胸圍を測り、それから體重を測り、おしまひは座高を測るやうに白墨で矢印を書いて、順序を示しておいたのである。

裸になつた子供達は洋服を着てゐる時とは、違つた可 さがある。

身長測定器の上に兩足を揃へて立つ子供達の姿は、實に小さくて可愛い。

「君は思つたより大きいね。」

などといつてやると背伸びをして、私の測るのを困らせたりするものもある。

背中を一つかるく叩いて

「いゝからだだ、ふとつてゐるよ。」

と賞めてやると急に自分の身體を見廻はして、双葉山にでもなつたやうに鷹揚にかまへる子供もゐる。

全國兒童の身長平均よりも大きいものや、平均體重よりも重いものもあれば、それよりもぐつと小さく痩せてゐるものもある。

肋骨のはづきり解るほど痩せ細つたものや、驚く程小さいものもあるのである。一米に滿たない小さなものや、十二、三瓩ほどの體重しかないものもある。

こんな體で、果して國民學校の課程を終了することが出來るであらうかと思はれ

る程、虚弱な子供もゐる。

身體檢査の結果は單に數字に現はして、統計するだけのものではなく、敎育的にはそれ〲保健衞生上の處置の基礎となり、父兄と共に疾患の治療や、矯正や保護を加へなければならないのである。

私達は檢査がすつかり終つてしまふと、一人一人の統計や比率を出したり學級、學年、の統計を出して、東京市や全國の兒童の統計と比較考察を加へるのである。

私の學級は檢査の結果は非常に思はしくなかつた。

要注意兒童が六十名中八名を數へ、その比率は一割三分三厘强を示し、其の中三名は遂に休養を要す悲しい結果となり、就學猶豫の手續きを取るに至つたのである。

私は結果を知ると共に直ちに父兄を呼んで相談をし、區の健康相談所に斡旋をしてレントゲンで見て貰つたり、校醫と相談をして、その處置方法を講じたりしたのであつたが、どうにもならなくなつてしまつた。あの感激的な入學式が終つて、歷史的な

國民學校の一年生になつたばかりで、此の悲しい事實に遭遇した父兄の心事はどんなであらうと思ふと、心から同情せずにはゐられないのである。

私も亦、六十人の中から、三人までも手離してしまふことは淋しいことであつた。

僅かに三週間の短かい期間であつたとはいへ、私も子の親としての氣持が解らないわけではない。

轉地靜養をしてゐる子供の心にも、同じ年頃の子供を見たら、どんな氣持になるであらう。私の心は暗くなつた。

更に頸腺腫張が十九名、圓背十一名、慢性鼻炎六名といふ結果である。

まるで養護學級の感がある。

私は此の結果を見て、學級經營の重點を、保健衞生におかねばならぬと思つたのである。どうしても子供達の身體をがつちりと鍛えあげなければならない。

先づ身體を造つてからのことだ。

最近の壯丁檢査の結果によれば、青年の體格は年々低下の一途をたどつてゐるといはれてゐる。軍國多事の時に、青年の體格の質の低下は憂慮すべき事實として、私達も大いに考へなければならない。

身體の弱い子供の存在は、ひとり父兄の問題ばかりでなく、國家にとつても大きな打擊である。

「成績は如何でせうか。」

などと知識の問題ばかり氣にして尋ねる父兄があるが、もつと〳〵眞劍に身體上の事に留意して欲しいものである。

極端に言ふならば、少し位頭が惡るくとも、身體さへよければお國の役に立てるのであるが、いくら頭がよくとも、身體が弱くては、何の奉公もよくし得ない場合がある。

先づ健康！　これが人生最大の幸福の基礎である。

私の學校では數年來兒童の體重を四月の定期測定の外に、七月、九月、十二月、一月、三月の各月に測定して、前月と比較し、增減率を父兄に知らせて、適當の處置を講ずるやうにしてゐるが、最近の結果は甚だ思はしくなく、殊に事變以來外米を食べるやうになつてからは、增加率は著しく減退し、寧ろ減少する傾向を見るのであるが皇國の將來を想ふ時、憂慮せずにはゐられない。

敎師の體重も二十五名中、增加したのは僅かに二名といふ驚くべき事實を見て、國民の保健上由々しき事態であることを思はずにはゐられなかつた。

敎師及び兒童の健康が、過勞や、榮養不良の爲に蝕まれて行くものが、相當多い事實に鑑みても、その對策を充分ねつておくことが大切だと思つた。」

四月二十九日

身體檢査を始める頃から學校では、行事の最も大切なものとして、天長節拜賀式に於ける禮法作法や、天長節について指導をするのである。

天長節は大切な國家の祝日であり、子供達には最初の拜賀式であるから、充分な指導をすることが大切である。

私は一週程前から、「ヨイコドモ」を通じて、天長節の意味や、國家の祝祭日に對する心得、天皇陛下の御盛德、皇室の御繁榮、天長節拜賀式に臨む態度や心得などについてお話をしておいた。

私達は櫻咲く日本の國に生まれ、山紫水明の地に育ち、毎日平和に幸福に暮らして行けるのは一體誰のお蔭であらうか。

生命の清い泉で
　汝の不純さを流し
魂を洗ひ清めて、純眞無垢になつたら
　子供達の魂も戰くであらう。
生命に充ちた美しい花も咲くであらう。
　私は少しでも良心的な人間として
子供達の雰圍氣の中に
　じつとして生きつづけて行きたい。

戰爭を五年も繼續してゐるといふのに、戰禍を遠く離れて敵影を一人も見ず、砲煙彈雨を知らずに過してゐられるなどは、何といふ幸福極まる國家であり、國民であらう。

隣國支那の民衆や、遠く歐洲各國の國民と比べて、　皇國民として生まれ育つたことを今日程有難く思つたことはない。

食物も衣服も娯樂も運動も學習も充分出來ることを想ふ時、聖代の恩澤の廣大なるをしみじみ感ずるのである。

一旦緩急ある場合、義勇公に奉ずるの精神は、ひとり大人の境地ばかりでなく、幼い子供達の心の中にも強く烈しく烙印されてゐることであらう。

子供達は學校の往き復りには、必ず奉安殿に最敬禮をしてゐるし、事　皇室に關するお話に及ぶと、必ず姿勢を正して傾聽するのである。まことに

肩を並べて兄さんと、今日も學校に行けるのも、兵隊さんのおかげであるが、

それ以前に大日本帝國をお治めする　天皇陛下　のおかげであることを知らなければならない。

私達は最も有難く最も尊い　天皇陛下の臣民として、限りないお惠みを受けて幸福な毎日を送つてゐるのである。

ひとり私達ばかりでなく、遠い祖先のおぢいさんも、ひいおぢいさんも、みなそれぞれ其の時代の　天皇陛下の臣民としてお惠みを受け、又私達の子孫も永遠に　天皇陛下の臣民として、お惠みを受け幸福に暮して行くのである。

私たちが父母兄弟と共に、一家内揃つて樂しく暮すことの出來るのも、また學校に來て先生の敎へを受け、お友達と面白く遊ぶことの出來るのも皆　天皇陛下のお惠みによらないものは何一つないのである。

四月二十九日は有難く尊い　天皇陛下のお生まれ遊ばされた天長節祝日であつて、宮中ではお祭りがあり、いろ／＼なお祝がある。

此の日は又觀兵式が執り行はせられ、幾萬の兵士を御覽遊ばされ、學校では　天皇陛下の御誕生日を壽いで、拜賀式を擧げ、學校長を始め子供達も一緒になつて、「君が代」をうたひ、　天皇陛下の御寫眞に向かつて最敬禮をする。校長先生はお勅語をお讀みになり、　天皇陛下のありがたいお話をして下さるのである。

此の日は朝早く起きて身體を淸め、兄さんや姉さんと一緒に、門口に日の丸を揭げそして　天皇陛下のおかげで大きく育つて行くしあはせを感謝して、お惠みの深かいことをいつまでも忘れないやうに心掛けて、　天皇陛下の御代萬歳をお祈りするのである。

私は子供達にも解るやうにお話をして、式の順序に従つて一つ一つ練習をし、禮法の指導をしておいた。

儀式は國民として最も大切な、嚴肅なものである。國民禮法として誰でも心得ておかなければならないものであり、入學當初の子供には徹底的に躾なければならないこ

とである。

入場前の用意として、容儀を正し、ボタンやホックのはづれてゐないやうに注意をしたり、手を洗ひ、口をすゝぎ、鼻汁をかみ、用便を濟ませておくことや、敬禮のしかたの練習、御眞影に對する態度、國歌奉唱や、勅語奉讀などの場合の姿勢など細かな點まで心を配つて注意を拂はなければならない。

いよ／＼其の當日が來た。

一點の曇りもない旗日和、天も亦慶祝の日を壽ぐやうに晴れ渡つた。

子供達は最初の儀式であり、國民の一人としての喜びを抱き、入學式の感激にも増して、元氣よく朗らかな顔で早朝から登校して來た。

軒並みにへんぽんと飜へる國旗、校門にも大國旗二旒が勇ましく揭げられてゐる。

國旗の下をくぐる子供達の顔も、一段と緊張し嚴肅さを湛えてゐる。

午前八時合圖のサイレンによつて校庭に整列した。一年生も、いつもと違つて今日

は上級生の間に伍して整列した。

國旗揭揚式である。

當番の先生の壯重な號令は校庭の隅々まで響き渡つた。

「氣ヲ付ケ！」

「右向ケ—右」

子供達は一齊に國旗揭揚場塔に向かつた。

「國旗揭揚」

先生と代表兒童の手によつて、國旗はする／＼と上つて行く。

「國旗ニ向カツテ注目」

子供達二千數百の眼はキラ／＼と輝いて國旗に注目された。身じろき一つする子供もゐない。

「直レ。」

「左向ケ――左」

再び正面に向かつた子供達は、ホツとしたやうな心持で壇上の先生に視線を移した。

こま〳〵と式場に於けるいろ〳〵な注意を受け、入場前の用意をすることになつた。

私達は一人一人、服装の點檢をしてから式場に案内した。

机や腰掛を取り去つた式場は廣々と、そして、淸くすが〳〵しい。子供達は一言も口をきくものはない。

聞えるものは床を踏む靴音だけである。軈てすつかり整頓も出來て、シーンと靜まりかへつてしまつた。

姿勢を正してじつと正面に視線を向けた數百の兒童達は、今や遲しと拜賀式の始まるのを待つてゐる。

學校長を始め先生方も所定の場所に整列すると、オルガンの合圖で一同敬禮をした。

學校長は壇上に登り、敬虔な態度で、御簾を上げられた。

正面に　天皇、皇后、兩陛下の御寫眞が、いとも神々しく拜せられた。敎頭の

「一同敬禮」

といふ號令で子供達は嚴肅な敬禮を行つた。

「國歌齊唱」

一年生はこれで二回目の奉唱である。充分の自信を以て今日は心からまごころこめて歌つた。

此の國歌こそ今日は全國津々浦々の學校に至るまで、一億國民の赤誠を傾け、君が代の千代に八千代に苔のむすまで彌榮えませと歌ふのである。

その歌聲は、遠く萬里の波濤を越え、大陸の彼方へ、天來の聲として世界人類の耳朶に響き傳はつたであらう。

私達一同は恭虔な態度で御寫眞に對し奉り最敬禮をした。

學校長の勅語奉讀に引續き、　天皇陛下の萬歲を壽ぎ、御惠み深き御高德にわたら

せられる有難きお話を伺がつて、天長節祝日の歌を奉唱した。

今日の佳き日は大君の
生まれ給ひしよき日なり

大和田の校歌を齊唱して、今日の晴れの佳き日を壽ぐ拜賀式は嚴肅の裡に終ることが出來た。

子供達は今や國民の一人として、天皇陛下の御代萬歳を壽ぐことの出來た喜びに小さな胸をふくらませ、感激で一杯になつてゐるのである。

一人の粗骨者もなく、立派に出來た本日の拜賀式は流石に國民學校の兒童だけあつて、感心しないわけにはいかなかつた。

殊に一年生の立派な出來榮えは、且てない程の成績であつたのである。

式が終つてから教室に入れて、本日の式の立派に出來たことを賞め、今日一日心からお祝ひする心掛で過すやうに、注意を與へて家に歸してやつた。

子供達は戸毎に飜へる國旗の下を、感激に滿ち滿ちて歸つて行つた。

端午の節句

「初幟こゝにも日本男兒あり」

鳴雪の句である。

軍國日本男兒を象徴する鯉幟が、五月晴のすがすがしい大空に悠々大氣を孕んで游泳する有樣は子供にとつても、又子の親としての心の中にも、胸のすくやうな詩境が沸き上つて來る。

その姿には八紘爲宇の日本傳統の精神が躍如たるものがある。

三月三日の女の子を祝ふ雛祭に對して、五月五日の端午の節句は男の子を祝ふお祭りである。

女の子でも男の子でも、それは國の寶であり、　陛下の大御寶、赤子である。子寶を授かつた家庭の感謝を喜悅、その心の露れが美しく形式化されたのが、桃の節句であり、端午の節句なのである。

端午の節句の起原にはいろ〳〵な說があるが、それは支那の古い時代、猛嘗君や崔信明、王鳳や胡廣などいふ英傑の誕生日が何れも五月五日であつたといふことから、この日を選んで、これらの英傑にあやかるやうに男の子の節句とするやうになつたといはれてゐるが、更に又支那の春秋時代に、楚の屈原といふ王族が才幹人に優れてゐたため、憎まれて讒訴され遂に汨羅の水に投身して死んだので、その命日である五月五日には每年故人の靈を慰めて、竹の筒に米を容れ水中に供へたのが、端午の粽の起りだと傳へられてゐる。

或は又五月の端の午の日を節句としたので端午の節句ともいはれ、必ずしも五月五日とは限られてゐなかつたともいはれてゐる。

然し何時の間にか五月五日と定められて、重五の節句ともいふやうになつた。支那に起つた事柄ではあるが、我が國には我が國固有の美しい沿革があつて、日本書記には、推古天皇二十二年五月五日、重五の節句に「藥狩」の行事がとり行はせられ、藥草の一つである菖蒲の起原は此の時に始まつたのである。

蒙古軍襲來の時には早良親王が勅を奉じて、京都深草の藤森宮に戰勝祈願をされ、宮の境內に澤山な旗指物を奉納せられたが、それが五月五日に當つてゐたので、その時以來旗指物を節句の飾りにするやうになつたと傳へられてゐるのである。

そして我が子よ強く丈夫に育てとの親心は、桃太郎や金太郎の鬼征伐や、魔除の神の鍾馗を飾り、鎧、兜に各種の武者人形を飾るのは、古來の家庭敎育の姿を現はし、それが今日にまで及んで來たのである。

我が國は世界のどこの國よりも、かうした家庭愛の行事が盛に行はれ、それが日本の美はしい姿であり、日本精神の象徵とさへなつて來たのである。

五月五日を中心として、

初幟、こゝにも日本男兒あり

といはんばかりに、家々には男の子を祝福して鯉のぼりを立て、軒に菖蒲を指しおかしはの餅を供へるのであるが、いつの間にか祝福の意味は消え失せて、それは單なる裝飾の行事となり、見榮や誇りの行事と變つて、本來の意義が見失はれて來たことは悲しいことである。

大きな幟が五つも六つも立つてゐるのよりも、田舍の一軒家にたつた一つの幟の立つてゐる方が、どんなに日本的であり、それが日本傳統の精神の現れであるかわからない。

初幟、こゝにも日本男兒あり

決して都會の競ふが如き幟ではなく、山の麓の藁葺の一軒家に、悠々風を孕んで大空を游ぐ唯一つの鯉幟にふさはしい句である。」

………………

學校でも五月五日は心ばかりのお祝をして、子供達と共に催ものをするのである。五月の月に入ると間もなく、國旗掲揚塔に大きな鯉幟りや吹流しが立てられる。掲揚塔の廻りに子供達を集めて、掲揚式を行ふのである。子供達は手を打つて大喜びをする。

「オホキイナア。」

「スゴイナア、アンナニフクランデヰルヨ。」

「オヨイデヰルヤウダナア。」

などと叫び聲が出る。そして歌ひ出すのである。

此の日一年生は講堂に集り、種々な學習の發表をして、半日の樂しい生活をするのである。

赤、黄、青の各組から、お話をするもの、唱歌を歌ふもの、劇をするもの、遊戲を

するもの、朗讀するもの、思ひ思ひの發表をする。

かうした場合も學校の行事は、唯面白く過すばかりでなく、禮法作法の躾や、子供達の發表態度の指導や、個性の觀察が行はれるのである。

國民學校では儀式や學校行事を重んじて、之を敎科と一體として敎育の效果を擧げるやうに努力することになつてゐる。敎科書にも、「カズノホン」には鯉幟の繪があり、其の下には勇ましい兵隊ゴッコの有様が畫かれてゐる。

五月のお節句は鯉幟を立てて、餘興をやり、おかしはを食べて愉快に樂しみ、それで終るのではなく、お節句の意義から、鯉のぼりの立て方、武者人形のお話に禮法作法の躾、發表の態度の訓練など、子供に行事を組織化して、子供の生活に溶かしこまなければならない。

五月晴れの大空の下に子供達は整然と並んで、入場を待つてゐる。

「今日は男の子のお節句です。これから講堂に行つてお節句祭をしませう。女の子は

お客様になつておよばれするのですよ。」

とお話をして、案内した。

「履物はきちんと揃へて入りませう。」

子供達はガヤ〳〵騷ぎ出したが、それでも上履は正しくならべられた。

講堂に入つた子供達は、正面の床の間に飾り立てたられた武者人形を見て、大喜びである。

「アツ、キンタラウサンガキルヨ。」

「ショウキサマモキル。」

「ハチマンタラウガキルゾ。」

「ボクノウチニモアルヨ。」

「ウチデモカザツタワ。」

などと喋り始める。一しきり騷ぐと、自然と子供達は靜まりかへつた。

すつかりお座が定まつたので、
「皆さん立つておじぎをしませう。」
「元康君に今日の會のごあいさつをしていただきますよ。」
私がかう言つて元康君を指まねくと、少し顔を赤らめながら出て來た。
子供達は一齊に拍手をして迎へた。敎へたわけではなかつたが、子供達は知つてゐたのである。
お友達の澤山な顔を見た元康君は、なか〱用意しておいた、挨拶の言葉が出て來ない。
暫らくあたりをキョロ〱見廻してゐたが、やがて思ひ出したのか
「ケフ　ハ　ワタクシダチ　ノ　オセツククワイデス。ヲンナノヒトモ　オマネキシマシタ。イロイロナコトヲシテ　タノシク　ヲハリマセウ。」
ペコンとおじぎをして歸つて行つた。又一しきり拍手が起つた。

プログラムは順序に進められて行く。女の子は招待のお禮にと唱歌を歌ふことになつてゐる。各組から十名宛、三十人もどや〱と出て來た。
國民學校と遠足の歌を齊唱した。男の子だちは
「ウマイヨ。」
「ジヤウズダネ。」
と賞め稱へた。頬笑ましい情景である。
今度は本郷君のお話である。本郷君はなか〱元氣があつて、態度もキビ〱してゐる。兩足をきちんと並べておじぎをする本郷君の態度はいつもと少し違つて、緊張してゐるやうである。
「エート、ボクハ　オハナシヲシマス。」
と言つてしばらく考へてゐる風である。
「ナニノオハナシスルノ。」

と尋ねるものがある。本郷君も亦それに答へて、

「マサヲサンノオハナシスルヨ。」

と言ふ。

「ホンゴウクン、イツカハナシタ、アレガイイヨ。」

などと注文をするものが出て來る。

「ウン、スルヨ。」

本郷君は前にもお話をしたことがあるのだらう。いつの間にか用意して來た話とは違ふことになつてしまつたらしい。

「アノネ、ムカシ　オヂイサントオバアサンガアリマシタ。サウシテオヂイサンハヤマヘシバカリニ、オバアサンハカハニセンタクニイキマシタ……。」

「アア、ソノオハナシナラボクシツテヰルヨ、シツテヰルヨ。」

と方々から抗議が出て來た。

本郷君も困つてしまつた様子である。

「皆さん、本郷君のお話をよく聞きませう。大變お上手ですよ。」

と私が注意すると、又靜まりかへつて傾聽する。

「サウスルト、カハノムカフカラ、オホキナモモガ一ツ、ドンブリコ、ドンブリコト、ナガレテキマシタ……。」

「オバアサンハ、ソレヲヒロツテ、ウチヘカヘツタンダヨ。」

と先廻りするものが出て來た。

「ナアーンダ、モモタラウノオハナシデナイカ。」

とつまらないやうな聲が聞える。

　本郷君はムキになつて、

「ソレジヤ、ベツノオハナシスルヨ。」

と言つて、又考へ始めた。

「ムカフカラ、クツガナガレテキマシタ。コチラカラキウリガナガレテキマシタ。クツガキウリヲタベマシタ。ソレデキウクツ、キウクツ。」

と言つておじぎをしながら引きさがつて來た。子供達はそれで滿足したのであらう大喝采をした。

だん〴〵進んで、今度は朗讀をすることになつた。男の子も女の子も「ヨミカタ」の本を持つて出て來た。

二列にならんでおじぎをする。その中の一人が代表で

「ワタクシタチハ、コレカラ、ホンヨミヲシマス。」

と挨拶をした。

「ガー、ガー、アシル、ヨチ　ヨチ　アシル。」

「おや、少し變ですよ。アシルと讀んだ人がありますね、もう一度きをつけて讀みませう。皆で一しよに、アヒルといつてみませう。」

「ハイ」

と私は合圖をすると、本讀みの子供も、座つてゐる他の子供達も一しよに

「ア　ヒ　ル」

と聲を張りあげて讀んだ。

「さあ、始めからもう一度讀みませう。」

「ガーガー　アヒル　ヨチ　ヨチ　アヒル……ハシレ　ハシレ　シロ　カテ　アカカテ……ココマデ　オイデ　ソロ　ソロ　オイデ……フー　フー　フー　フクレタフクレタ　カミフーセン。」

と一氣に讀んでしまつた。

「大變、お上手でしたね。座つてゐる人も讀んでみませう。」

大部、倦きていたづらを始めた子供もあるやうなので、氣分を變へさせようとして試みた。

「ガー　ガー　アヒル……。」

と暗誦をはじめた。物凄く大きな聲である。

引續いて唱歌遊戯や、ラジオ體操、劇などがあつた。

どれもこれも元氣一杯で、子供達はとても樂しさうである。

「今日は大變、お行儀よく、いろ〳〵お上手な發表がありましたね。お祝ひにお菓子をあげませう。」

私達が一週間も前から賴んであつた、おかしわ餅とおせんべいが袋に入れられて屆けられた。

子供達は飛び上がつて喜んだ。目玉を輝かして、お菓子の方にすいつけられてしまつた。

「順番にあげますから、自分のお座にちやんとしてゐませうね。」

と言ひながら、手分けして配布することにした。子供達はきちんと座つて、兩手を

膝の上にのせ、天井とにらめつこを始めた。唾をのみこんでゐるものもある。

膝の上に一つづつのせて行くと、子供達は嬉しさうな顔をしておじぎをする。中にはたまらなくなつたと見えて、手を差のべるものもゐる。

「そんなことをしないで、自分の番を待つてゐませう。」

と私が言ふと、外の子供達が、

「キミ、イケナイヨ、ワルイコドモダナア。」

と憤慨するものもある。

あまり天井を向きすぎて緊張してゐるためか、膝の上にのせられても、知らないやうな顔をして、相變らず天井をにらんでゐるものもゐる。たまりかねたのか隣りの子供が、

「オクワシガ　キタヨ。」

と注意をする。

聽てすつかり配り終ると、ガサ〳〵お菓子袋をいぢる音が聞え出した。
袋の中を覗いてみて
「オクワシガアルヨ。」
「オセンベイモアルワ。」
などと、まはりのお友達と見せ合つてゐるものもある。
「ボクノニオセンベイガ　七ツアルヨ。」
「ワタシノニハ六ツシカナイワ。」
とつまらなさうな顔をする女の子もゐる。
「センセイ一ツタリマセン。」
とベソをかいて來るものもある。私は餘つた袋からおせんべいを一枚とり出して入れて上げた。その子供は喜んで自分のお座に歸つて行つた。
「こゝではおせんべを二ついたゞいて、あとは、おうちに持つて歸りませう。」

子供達は、ガサ〳〵と袋をあけておせんべいを取り出した。
「センセイ、イタダキマス。」
「センセイ、ゴチソウサマ。」
とめい〳〵挨拶をして食べ始めた。
「おせんべいのくづをこぼさないやうに食べて下さい。」
子供達の食べてゐる様子を見てゐると、その子供の性質がよく解る。鷹揚にかまへてゐるもの、食べながら始終まはりを見てゐるもの、ポリ〳〵と一氣に食べるもの、少しづつ、さも措しさうに食べてゐるもの、樣々である。
「殘つたのは、お家へお土産に持つて歸るのですよ。」
と言ふと、
「ワタシ、オカアサンニモツテイツテアゲルノヨ。」
「ボク、カツヒコニモツテイクノ。」

などと母や弟妹に、お土産を持つて歸る樂しさをお友達と語り合つてゐる。

本なども讀ませて見ると、ちつとも讀まないが、かうした空氣の中に浸らせると案外おしやべりになつて、寧ろその中心となつてゐるなどの意外な場面が發見される。

人前に出ても少しも人おぢのしない大膽な子供、すつかり辟易してしまつて、急に喋べれなくなる子供、始終ニコリともせずに默りこくつてゐる子供、樣々である。

行事は生活である。生活を通して子供達は育つて行くのである。

私達はその生活の中から子供の樣々な姿態を發見して、指導の基礎づけとしなければならない。

或る父兄の所感

入學式が終つてから二三日經つた時、子供が一通の封書を私に屆けた。

美彌子さんのお母樣からである。私は開いてみると、次のやうな意味のことが書かれてあつた。

○

新入學の四月一日、諸先生お揃ひの前で、私達の子供が、立派に「君が代」を奉唱しました聲を聞きました時は、非常な驚きと喜びに感慨深いものがありました。

これからも、元氣に先生の御教授を戴けるのかと、思ひますと心の躍る感じが致します。

小さいながらも、一人の國の寶を育て上げることを思ひますと、誠に感銘深いものがあり、自然瞼が熱くなりました。

これが苦勞の中に育てた我が子であると思ひますと、これからも尙一層勉學に躾につとめたいと深く心に誓ひました。

どうぞ、これから大和田國民學校のヨイコドモとして、お敎へ下さいますやうお願

ひ致します……と。

私は入學式の時、聲を上げて感泣した母親が、誰であつたかを始めて知ることが出來たのである。

美彌子さんは、本當に大人しい、靜かなやさしい子供である。

そして躾の點でも、他の子供達の模範となる人である。

このやうな立派な子供に育て上げたお母さんの喜びは、さこそと感銘の深いものがあつた。

どんなに御苦勞なされて育てられたか、私にも想像して餘りあるものがあつた。

此のお母さんは、きつと泣いて泣いて感激を深めて、今までの苦勞を一瞬の中にふき飛ばしてしまつたことであらうと思つた。

明日からの張り切つた、希望に輝く明かるい生活を意識したことであらう。私は「ヨイコドモ」になるやうに、心から祈らずにはゐられなかつた。

春の遠足

教師の側では校外教授であるが、父兄の側では遠足と言はれてゐる。子供達にとつては最も樂しい學校行事の一つなのである。

入學以來大勢のお友達と一しよに、團體行動を取るのは之が最初であり、先生やお友達と一しよに電車に乘つたり、お辨當を食べたり、遊んだり出來ることは何と言つても嬉しいことである。

親にとつても、それはどんなにか喜びであらう。日一日と共同生活に慣れ、團體の一員として訓練されて行く姿を見られたならば、どんなにか樂しいことだあらうと想像される。

私達も亦すく／＼と育つて行く子供達の姿を見つめてゐると、決して他人事とは思はれないのである。自分の分身の育つて行く喜びと同一な感情になるのである。

學校で行はれる行事は、常に周到な計畫と準備と訓練とによつて實施される。

五月始めの敎外校授が、取りを決定されると、四月の上旬には、場所が定まり電車や汽車の交渉が進められる。

此の頃の交通機關の混雜さは、何百人といふ子供達を引率して行く私達にとつては並大抵な事ではない。

一人二人の子供達を連れて郊外に遊びに行かれる父兄達でさへも、車内の混雜に悲鳴をあげるやうな有樣であるから、想像するに難くはないであらう。

昔は貸切電車などもあつて、混雜の憂も少なかつたし、乘り降りの危險もなかつたが、最近のラッシュアワーの狀態を見たなら、子供などは押しつぶされてしまひさうだ。

危險だからといつて、子供達の樂しい行事を抹殺してしまふことも出來ないし、積極的にはさうした混雜の中でも、子供達だけは、一糸亂れざる團體行動を取ることを怠つてはならない。

校外敎授の場所や日時が決まると、私達は實地に調査をするのである。

一年は玉川及びよみうり遊園地ときまつたので、私達は、電車の交渉や實地の調査に出かけることにした。

玉川電車の運輸課で電車の交渉をする。

五月七日の午前八時、澁谷驛を出發して、よみうる遊園地前に八時三十分には到着する。歸りは午後二時に遊園地前より乘車出來るやうに、また電車賃の計算など交渉を進める。

然し五月の上旬は、校外敎授の季節であるから、方々の學校でも實施される。五つも六つも申込みがある。思ふやうな都合のよい時刻の電車を約束する爲には餘程前か

ら申込まないとうまく行かないのである。

私達は、それから實際に出かけて調査を進める。

電車の兩側の窓から見える主なるものを手帳に記入する、當日種々と敎へてやる爲である。

澁谷驛からよみうり遊園地前まで何分かゝるか時間を測つたり、到着してからの遊園地との交渉も行はれる。

何時間位、此の中で遊ばせるか、どんな物は危險であるとか、又危險な場所はどことどこか、水呑み場所はどこどこに在るとか、便所は何個所あつて、どこにあるか、どんな順序で中を案內するか、どんなものを觀察させるか、敎科との連絡はどうするか、晝食はどこの場所でさせるか、手を洗ふ場所、お茶屋との交渉など、中々大變である。

綿密な、交渉と調査が濟むと、私達は學校に歸つて立案計畫をするのである。

案が出來ると印刷物にして父兄に配る。

一、目的地　東京府よみうり遊園地

二、日　時　五月七日（木）

時　刻　午前七時三十分　校庭集合

人員點呼

午前七時四十五分學校出發

午前八時五分　澁谷驛着、乘車

午前八時三十分　よみうり遊園地前到着

午前八時四十分　入園

遊園地內で遊んだり觀察させたりする。

午前十一時　晝食

十二時まで休憩

午後零時遊園地出發　玉川原見學

午後一時三十分　よみうり遊園地前着、乘車

午後二時澁谷驛着

午後二時二十分　學校着

午後二時三十分　解散

三、電車賃　兒童一人往復金十二錢

内區よりの補助　七錢

お茶代　金二錢

計、兒童よりの徵收金七錢

附添一人　金二十八錢

お茶代　金二錢

計　三十錢

五月五日までにお屆け下さい。

四、持　物　お辨當、いつもの食事の時より多くして下さい。

水筒のある人は水筒を持參、ハンケチ、ハナガミ等を忘れぬやうに。

副食物や金錢は絶對持參せぬこと。

五、注意事項　遠足の前夜は、食べ過ぎ飲み過ぎ、寢冷えをせぬやう御注意下さい。

いつもより早寢をさせて下さい。

朝起きて、氣分が勝れぬ人は御遠慮下さい。

服裝は輕裝で普段着にして、履物は、はき慣れた丈夫なものにして下さい。

持物には總べて學年、組、氏名を記入して下さい。

雨天の場合は又別にお知らせ致します。

こんな印刷物を一週間も前に配布しておくのである。

子供達は遠足が近くあるといふことが解ると毎日毎日、この話で持ち切る。」

「センセイ、イツアルノ。」

「センセイ、ドコニイクノ。」

「センセイ、アメフラナイ。」

「センセイ、オクワシヲモツテイツテイイ。」

一人一人同じことを聞きに來る。

「よみうり遊園地ですよ。」

「お菓子などは持つて行つてはいけません。」

「さあ、お天氣はきつとよいでせう。」

などと一々答へてやると、子供達は手をうつて大喜び

「ヨミウリユウエンチニイクノヨ。」

「ワタシオトウサントイツタコトアルワ。」

「アソコハオモシロイヨ、イロンナモノガヰルヨ。」

「ブランコガアルヨ、ボクノツタ。」

「オサルガヰルヨ。」

「オイケモアル、ボートガアルヨ。」

「ワクシ、ボートニノリタイナ。」

「ハヤクイキタイ、センセイ、イキマセウ。」

うるさいぐらゐの騷ぎである。

寢ても起きても遠足のことで夢中である。お天氣のことが心配だと見えて、二三日前からお教室の窓や、お庭の木の枝には、テルテルバウズが紙で作られてぶらさがつてゐる。

運動場ではお空を眺めて、テルテルバウズの唱歌を歌つてゐる子供もゐる。

テル　テル　バウズ　テルバウズ　アシタ　テンキ　ニ　シテ　オクレ……。

その前夜はどこの家庭でも大變な騷ぎであらう。二人も三人も兄弟姉妹のある家庭などは、其の準備の爲にお母さん方も大抵なことではないと想像される。
でも此の忙しさは決して苦痛ではない。苦勞を知らない樂しい仕事である。
早く寢せやうとしても、なか〳〵子供達は寢つかない。
「オカアサン、アシタノオベンタウ、ナニツクツテ、クダサルノ。」
「アシタノ、オテンキ、ダイヂヤウブ。」
などと心配でたまらないらしい。
「早くお寢みなさい。あした起られませんよ。」
と注意をすると、寢てしまつたやうすであるが、又暫らくすると
「オカアサン、 モウ ナンジ、イイオテンキ。」
と尋ねる。
「大丈夫ですよ、あしたはとてもよいお天氣です。」

とやさしく答へてやると、
「アア、ウレシイ。」
と喜んで、いつのまにか眠つてしまふ。
夢の中に遠足のことでも見てゐるのか、頬笑さへ浮かべて。
若しも雨など降つたりしたら大變である。一日中淋しい顔をして、學習能率はあがらない。何か氣分でも轉換してやらなかつたら………
私達も扱へ兼ねるほどである。
ドシヤ降りの雨なら、まだあきらめよいが、どんより曇つて今にも降りさうな天氣の時は、子供達の氣持を納得させるのに骨が折れる。
「ダツテ、センセイ、アメガフツテキマセンヨ。」
現實に降つてゐなければなかなか承知しない。
「今に雨が降つて來ますよ。」

などと言つて見ても承知するものではない。

晴天の場合の子供達はすばらしく張り切つて、午前四時頃はとび起きてしまふのである。

「まだ早いから寢てゐなさい。」

と言つてもきかずに

「オカアサン、オテンキイイ。」

眞先に天氣のことを案じて起きて來るのである。唯一途にこのことばかりを思ひつめてゐる子供の心を考へると、私達も眞劍にならないわけにはいかない。

リユツクサツクにお辨當を入れて背負つた子供達、水筒を下げて、輝しい顔をしてゐる姿は、入學の際の姿とは又趣を異にしたものがある。

午前七時頃には附添の手に引かれて元氣で登校する。お教室に入つてじつとしてゐるものもあれば、運動場で驅けまはつてゐるものもある。

附添人も百人近くもゐる。まだ入學してやつと一ケ月、心配もあるだらう、子供の方でも不安なのであらう。

然し私達の立場からいへば、附添人の多いことは決して有難いことではない。正直のところ足手まとひになる位なもので、自分の子供のことばかり世話をして、他の子供のことを省みないやうな、又子供達の列の中に入つて、隊伍をくづし、統制を亂すなど、團體訓練の豫定されたことが、どれだけ實施することの出來ない場合があるか知れないのである。

子供達も亦、附添ひがあると、敎師の方には心を向けずに、自分の母親の方にばかり氣をとられる。

自然、學校でいふ校外敎授は、父兄側のいふ遠足になり終つて、一日電車に乘つて行つて遊んで歸るといつた結果になつてしまふのである。

今年は附添の人々は、子供の列の後方に並んで貰ふことにした。

出發前の用意として、人員點呼、道路を歩く時、電車の中や乘り降りの注意などをして、果物やお菓子など持つて來てゐないか、どうかなどを調べて見た。

遠足の場合などに副食物を持たせるか否かといふことは、隨分今までは問題になつたものである。

一年に一度や二度の遠足だから持たせた方がよい。親としても種々持たせたいであらう。

子供も樂しいことであらう、といふやうなことで餘りさういふことに嚴格な取締りをしなかつたものである。

持たせると定めたら制限などをしてもだめであつて、まるで副食物の競爭のやうな有樣を呈して來る。

私などは昔からお辨當以外のものは持たせない主義であつたが、いつもうまく徹底することが出來なかつた。

子供達は言ふことを聞くのであるが、父兄の中には

「先生がそんなことを言つても、少し位はいゝだらう。餘り澤山持つて來ては、いけないといふ意味なのだ。」

などと學校の意志を勝手に判斷して、學校訓練の統制と秩序を亂す人があつて、非常に困る場合があつた。

中には又非常に正直に嚴守する人もある。然しいざ晝食の際になると、外の子供達は皆種々な副食物を持つて來て、それ見よがしに食べてゐる。正直に學校の言ふ通りに守つた父兄はど、んな心持で見るであらう。

然もそのことを教師が不徹底にしておいたなら、學校も教師もその信念を疑はれても已むを得ないことになる。

たゞ一人でもよい、學校の意志を尊重して、實行をする父兄があつたなら、その一人を取り上げて、他の多くの人々を啓蒙してあげることが、學校の教師の務でなけれ

ばならない。
　持つて來させないことにしたならば徹底的に取締つて、一人の違反者もないやうに注意しなければならない。
　一人の違反者でも見逃したなら、それは統制と秩序とを亂す所以であり、教育は行はれ得ないのである。
　闇取引などと言はれ、統制の網の目を潜つて不當な利益を擧げたり、買溜めしたりすることが、國の秩序を亂す非國民であるならば、學校の統制や秩序を亂す父兄は、國體生活をなし得ない、非協同者として、排斥される存在でなければならない。
　學校や教師は、經營の上に絶對的な信念を持つて臨まなければならない。そしてそれはどこまでも一貫した強いものでなければならないのである。
　或場合には善く、或場合には惡くなるやうな、朝令暮改の如き態度で經營をしてゐたならば、どんなに子供達の去就を迷はせ、判斷を誤らせることになるであらう。

　校外教授も團體行動の修練であり、忍耐の涵養であり、社會生活への導入であり、規律と統制と秩序とを持つ學習の延長なのである。喜びと樂しみはどこまでも喜びと樂しみとして抱かしめてもよいが、物見遊山のやうな氣持であつてはならない。
　私は父兄の方々にも此の志を明確にして、絶對に規定された方針の下に實行させて欲しいことを強調したのである。
　午前七時三十分には全員整列、出發することになつた。
　子供達は誰にともなく
「イツテマヰリマス、イツテマヰリマス。」
と挨拶をして出かけた。
　校門を出ると直ぐに歌ひ始めるのである。
「ソーラ　ハ　アヲゾラ
　ヨーイ　テンキ

ミーンナゲンキ　ニ
アールキマセウ
ケフーハ　エンソク　ウレシーイナー。」

最近習ひ覺えたばかりの遠足の歌を歌つて得意である。二人づゝ仲良く手をつなぎあつて、それでも自然に歩調が合つてゐる。

澁谷驛の最近の混雜は大したものである。此の混雜を縫つて子供達を引率する私達は全く心配である。迷ひ子は出來ないか、おいてきぼりになつた子供はゐないか、

電車に乗つて出發したとたんの氣持は、實に不安なものがある。

「若しや一人殘りはしなかつたか。」

さういふ場合、直ぐに念頭に浮かぶのは、平素からボンヤリしてゐる子供とか、チョロ〳〵してゐて、ちつとも落付きのない子供の顔である。

それ等の子供の顔を、ガヤ〳〵騒いでゐる一團の中から見出した時は、思はずホツ

と安心する。

電車に乗つても少しも氣を弛めることは出來ない。

窓を開けて新しい空氣を入れ換へてやらうとすると、其の窓から手を出す顔を出す目を四方八方に配つて危險防止をしなければならない。

平常、元氣のある者が、とても靜肅にしてゐるのも却て心配となる。

「氣持でも悪いのではないか。」

とか

「頭かお腹でもいたいのか。」

と、尋ねて見ると案外元氣で

「ナンデモナイデス。」

といふ。やつと安心するのである。窓から見える、兩側の移り變る風物は、子供達の興味をいよ〳〵深かめるのである。

「センセイ、ズーットムカフノ、オヤマガウゴイテヰマス。」
「アソコニアルノハナンデスカ。」
などと尋ねたり、報告したりするものがある。
「どれですか。どこにあるの。」
と共の子供の傍に行つて、指さす方を見るがなか〱子供の言ふものが發見出來ない。いろ〱苦心してやつと探し求めると、屋根にとまつてゐるカラスなどであつたりする。子供の目は鋭い。

窓から見える遠くのものも、人知れずよく見てゐるものである。綴り方などを書かせて讀んでみると、そんなものがあつたらうかと思はれることが書いてあつたりする。他の子供達に尋ねて見ると大抵の子供がよく知つてゐる。

子供の觀察は鋭くて、そして細かいところまで見てゐるのがある。牛がゐたといつては報告する。馬がゐたといつては報告して來る。自動車だ、自轉

車だと子供達には見るもの聞くもの總べてが、珍しく感じ、嬉しいのである。始終目的地のことを心配して、次の驛を聞くものもある。
「センセイ、マダデスカ。」
「ツギハドコデスカ。」
「まだ〱ですよ、後七つもあります。」
と、はつきり數を敎へておくと、一生懸命になつて數へだす
「アト　七ツ、アト七ツ。」
などと調子をつけた聲が段々電車一杯に擴がつて行く
「アト、六ツ、アト六ツ。」
と熱心に指を折りながら餘念のない子供もゐる。
「センセイ　マダコナイノ、オナカガスイテシマツタ。」
などと訴へて來るものもある。

とう〳〵目的地に着くと子供達は「萬歳、萬歳」といひながら降りる。忘れ物を調べ點呼する。

遊園地は方々の學校の兒童で一杯である。私達の學校を入れて十二校といふから、二千以上の子供達が入つてゐるのである。

皆同じやうな服裝であるから、餘程はつきりとした目じるしをつけさせるとか、嚴重に管理しなければ、迷ひ子が澤山出來る。

まるで芋を洗ふやうな混雜の中で、運動器具にむらがり集まる子供達は戰爭のやうな勢ひである。

私達は子供達によく注意を與へ、笛を鳴らしたら必ず集まるやうに、先生の姿の見える所で遊んでゐるやうに、お友達と一しよにゐるやうに各班を作つてやつて解散した。

ワーッと歡聲を上げながら、思ひ思ひの目的物に突進して行く。」

ブランコに乘るもの、滑臺を滑べるもの、ジャングルに登るもの、飛行機を見てゐるもの、追ひかけごつこをするものなど樣々である。

私達は手分けして方々見て廻つた。私達の姿を見つけた子供達は、嬉しさうに飛びついて來る。

「センセイ、アソビマセウ。」

と腕にぶら下がるもの、首玉にしがみつくもの、背中にのるもの、腰につかまるものなど忽ち黑山のやうに集まつてしまふ。

鬼ごつこ、かくれんぼ、などをして遊んでやつて、又他の一團を訪れると同じやうに集まつて來て遊ぶ。

先生は子供と同じ位、活動力の旺盛なものでなければ務まらない。

くた〳〵に疲れて、休憩してゐると、又方々から集まつて來て、連れて行かれてしまふ。

鬼ごつこを始めると、先生ばかりどの鬼も追つて來るので、汗びつしよりになる。時計を見ると十一時に二十分前である。私は笛を鳴らして子供達を呼び集めた。人員點呼を行ふと、必ずどの組にも二三人集まつて來ないものがある。

「お友達は皆、ゐますか。」

と尋ねると、

「ヨシダクンガキマセン。」

「ミヤモトクンガキマセン。」

などと報告する。幾人かの子供は、呼びに行く。吉田君や宮本君が、大勢のお友達にかこまれて來る。

やつと揃つたので、晝食をする場所に案内した。見晴らしのよい芝生の上に、めい〳〵席を定めさせてから、お茶屋から出したバケツや、水道で順々に手を洗はせた。

皆と一しよにお辨當をいたゞくのは、これが最初である。お辨當をいたゞく作法などを、改めてまた注意してから食事をさせることにした。

「イタダキマス。」

と一齊におじぎをしながら言ふ。まごころこめて作つていたゞいたお辨當をひらくと、どれもこれもおいしさうなものばかり。

「おいしさうですね。」

と私が言ふと皆ニコ〳〵しながら

「ホンタウニオイシイデスヨ。」

と言はぬばかりである。

「よくかんでゆつくりいたゞきませう。」

子供達は皆熱心に食べてゐる。どの顏もおいしさうであり、嬉しさうである。

私達はその間をまはりながら見て歩いた。流石は國民學校の兒童達だけあつて、學

校の定めた通りのお辨當以外のものは、一人も持參しない徹底ぶりである。父兄の人々にも感謝をしたい氣持になつた。

昔はよくリユツクの中にかくして持たせてよこしたり、父兄が持參して晝食の時に自分の子供にばかり食べさせたりして、私達の訓練や躾を壞して失望したこともあつた。

私達も子供の間に交つて食事を始めた。お辨當はにぎり飯である。

「センセイノオニギリダヨ。」

「ズヰブンオホキイネ。」

とか

「二ツダヨ、ヒノマルベンタウネ。」

などと話し合つてゐる。

先生のことは子供達にとつては、頗る重大問題であり、關心事である。

腹が一杯になると、旺盛な活動力は子供達を決して靜止させてはおかない。

食休みをさせると、私達は子供を引きつれながら方々廻り始めた。

植物を觀察させ、知つてゐる名前を言はせたり、花の形や色や數などを調べさせる。動物を見ては、種類や形や、餌のたべ方、運動のしかたなどを發表させる。又運動器具の名稱や使ひ方を敎へ、實際にやらせてみては、いろ〳〵工夫させたり考へさせたりする。

一通り遊園地内の見學がすむと、私達はそこを出て川原の方へ行くことにした。遊園地でもつと遊びたいとの希望であるが、豫定した時刻にもなつたし、又川原の方に行きたいと希望するものも出て來た。

私達は、川原の礫の上に腰を下ろして暫らくあたりを見渡した。廣い廣い川原には、澤山の人々が群がつて散在してゐた。

鐵橋を時々電車が通ると、子供達は一齊に萬歲をする。

「バンザーイ」「バンザーイ」「バンザーイ」

向かふ岸にはトロツコが動いてゐる。練習飛行機が頭上にさしかゝると、子供達は大喜びで「萬歳」をする。手を振るもの、帽子を振るもの、踏び上るもの樣々である。

中には、つみ草を始める女の子も居る。

「センセイ、コノクサタベラレマスカ。」

と餅草を持つて來る。

「食べられます。たくさんとりませう。」

他の子供達も呼び集めて摘み草を始める。軈て摘み草も倦きて來ると、川原を少し歩きまはつて歸ることにした。子供達は軍歌を歌ひ出した。ほこりの一杯立つてゐるところを、平氣で歌つて歩いて行くのである。

停留所は歸りを急ぐ方々の國民學校の兒童で一杯になつてゐる。貸切りであるから、順番さへ待てば混雜は防ぐことが出來た。

私達は豫定通り歸校することが出來た。校庭に整列して「奉安殿」に最敬禮をしてから、今日の反省を加へ、種々注意をして解散する。

電車の中で疲れて眠つてしまつた子供も、すつかり元氣になつた。

「お家へかへつたら、よく、手や顔を洗ひ、うがひをしませう。今日見たことや、やつたことをお話しませう。」

「ハーイ」

「あしたは何時ものやうにおけいこがありますよ。今晩は早く寢て、あしたは元氣よくいらつしやい。」

「ハーイ」

子供達は一々手をあげて答へる。

「最後に大和田の萬歳を唱へませう。」

子供達は、皆帽子をとつて用意する。

「大和田國民學校、萬歲。」

「バンザーイ。」

晴天に惠まれた校外敎授は、子供達の充分なる滿足を得て、無事に終ることが出來た。

一人の故障者もなく、滿足しきつた子供達の顏を見てゐると、私達も心からの喜びを禁じ得ないのである。

「サヤウナラ、サヤウナラ。」

子供達は、めい〳〵私達の所に來て挨拶をして歸つて行つた。

父兄達も禮をのべて歸つた。

私達は無事に濟んだことを感謝しながら、彼等の後姿を見送つた。

子は親の鏡

私の學校では春秋二回父兄會を開いてゐる。春の父兄會は五月下旬、秋は十一月下旬である。

五月の父兄會は午前中は授業參觀で、午後一時から學校長の挨拶、受持敎師との懇談である。

身體檢査、校外敎授などの學校行事が終ると、引きつづき父兄會である。

四月以來の子供達の作品、綴り方、書き方、圖畫、工作等を用意して、見て貰ふのであるが、最も大事なことは結果としての作品を見ることよりも、身體檢査の結果の處理につき協議をしたり、今まで觀察した子供達の性格について、具體的に事實を示して話し合ふことが大切である。

長所や短所、美點や缺點、日々の學校生活を通して觀察したことや、身體檢査や校外教授を通して觀察した子供達の個性について、腹臟なく相談し合ふことが最も肝要なのである。そして家庭に於ける子供の行動と比較して見たりする。學校と家庭との打合はせが行はれなければならない。

父兄會の形式や方法については、種々と問題があるが、子供を中心として懇談協議したり、作品を通して觀察したりすることが、主とならなければならない。

國民學校は、學校と家庭の密接な聯絡を强調して、施行規則の中にまで明記してゐる。

今までも聯絡がなかつたわけではなく、相當努力を拂つて來たのであるが、一般には家庭は教育を學校に委せ放しにし、學校は又家庭教育のことを等閑にする傾向があつた。

まして社會から受ける教育の影響については、一部の人々を除いては全く無關心で

あつた。學校の教育が家庭にまで浸透することが大切である。

教育の一貫性とでもいふ學校・家庭・社會が、皆教育を想ひ、教育に努力し教育を徹底するやう協力しなければならない。

學校と家庭とがまちまちな教育をしてゐたり、學校で教へられたことが、社會では行はれてゐないなどといふ矛盾したことがあつたなら、子供達は何處に眞實を求めて行けばよいのであらう。

學校と家庭には間隙があつてはならない。家庭ではよく自分の力が及ばなくなると

「學校の先生に言ひつけてやる。」

などと先生を非常にこはがらせるやうに仕向けてゐるが、それはまるで反對で、もつと親密になるやうにならなければならないのである。子供達は實につまらないことが原因で、學校が嫌ひになつたり、先生が恐ろしくなつたり、お友達と喧嘩をするやうなことがあるものである。

學校と家庭こそは、子供達にとつて安住の地でなければならない。それ故に、學校と家庭とは平素から密接に聯絡をとり、協力し、相談し合つて、子供達を善く導くやう努力せねばならない。

父兄會は行事の一つとして大切なものであるが、行事として濟ませることだけではなく、そこから常に子供達が生きて行くやうな、育つて行くやうな事實が取上げられなければならないのである。

父兄會には大抵の人々が見える。

當日都合の惡るかつた人々とは、必ず其の中都合をして聯絡をとつて行く。

私は且つて六ケ年間受持つた子供達の中で、遂々一度も父兄會に見えなかつた父兄を思ひ出す。私が常に訪問しても留守であつたので、兩親の顏を見たことがなかつた。從つて其の子供はまるで放り投げられてゐる形であつた。可愛想で未だに記憶に殘つてゐる。

子供が妙にぐれてしまつたり、妙な習癖が現れたりすることは、大抵家庭の缺陷が影響してゐるものである。

四十名近くの父兄と、一々懇談することは容易なことではない。

人事相談所でも、一日四十人近くを相手に相談することは稀れであらう。

どの父兄も、二分でも三分でも、受持教師と話をして行き度いと念願するのは當然なことである。然し中には他の迷惑も考へずに、獨占的に雜談をしたり、同じことを二度も三度も繰りかへす人々もある。

私はいつも一般的な問題は全體に話をして、特に私の方で打合はせをして置く必要のある父兄のみに懇談をし、他は父兄の方として、是非話しておかねばならないことのある人々のみと話し合ふやうに實施して來た。

或る場合には、番號札によつて順々に話し合つたこともあつた。

昔の話題は

「この頃の成績は如何でせうか。」
「算術はどうですか。」
「讀方はどうですか。」
と學科の成績ばかり氣にして尋ねられたものであつた。
私は
「おからだの方は御心配ありませんか。」
と言つて反問すると
「でも、入學試驗のことが心配で。」
などと言ふ人が多かつたものである。
此の頃は餘程父兄達の考へも變つて來たやうである。先づ最初に身體のことや學校生活の狀況を尋ねる。勿論國民學校制に於ける成績考査のことや、成績評價のことは心配であるに違ひはないが、この點については學校長からも話があつたことであるし、

種々な機會に話し合ひがあつたから、觸れないのでもあらうが、話題が最近よほど變つて來たことからも、徐々に父兄の教育觀が動きつゝあることが看取されるのである。
長い間の經驗は
「私は〇〇の母です。」
などと自己紹介がなくとも、私達には大概は解るものである。
「子は親の鏡」とよく言はれるが、全くよく似てゐる。悪いところも、善いところも驚くばかり受けついでゐるものである。
「瓜の蔓には茄子はならぬ。」
と昔の人はうまいことを言つたものである。
「あの子はちつとも落付きがなくて困ります。」
などと言はれる母親自身が、案外落付いてゐないものである。
蟹の親子の如く、自分のことは見えないで子供のことばかり氣がつくのである。

子供は親の鏡である。私達は教室で見る子供達の言動を見てゐると、凡そ其の子の母親が想像出來るのである。

神經質な母親の子は、どことなく神經質である。

例外の例は常にある。極端に相反する場合もある。

けれども多くの場合はさう著しい違ひはない。

快活な母親の子は、矢張り快活である。

後姿から音聲や動作まで、よくもまあ似てゐるものだと驚くの外はない。

「相似形」といふものがあるが、親と子の場合などは最も適當した例であらう。

何となく落付いた、ゆつたりとかまへてゐる子供がある。氣立のやさしい、奥床しい感じを受ける子供。その樣な子供の母親を見た時、その子を大きくした母親を發見することが出來て、私達はとても嬉しいものである。

こんこんと盡きざる泉の水を汲んで

若木のほとりにふりかけたら、

若木はきつと蘇へり、緑の色を増すであらう。はち切れさうな生命は、

生き生きとした緑の中で育つだらう。

私は絶えず泉の水を汲みとつて、

ふりそゝぐ一人の人間でありたい。

若木はやがて巨大な逞ましき樹木となるであらう。

雨の日の子供

梅雨期に入つたので、毎日どんよりと曇つた日が續く。濕つた空氣が一層蒸し暑くするのである。

學校生活にも慣れた子供達は、自分の教室だけに閉じこもることは苦痛になつたと見えて、此の頃は隨分遠くの教室まで遊びに行くやうになつて來た。

始業のサイレンが鳴つても、なか〳〵教室へ歸つて來ない子供が、二三人ゐる。

「どこに行つてゐましたか。」

と尋ねると

「五ネンセイノオキヤウシツニイツテキマシタ。」

などと答へる。

「サイレンが聞えませんか。」
と言ふと默つてゐる。もつとも解つたから歸つて來たのであらう。
雨の日は子供達にはつまらない日である。雨の日は落付きがあつていゝなどといふのは大人の感傷である。
子供にとつては、有り餘るエネルギーを發散させずにはゐられないのである。
雨の中でも、子供達は濡れながら運動してゐる。
私は、雨の日の休憩時は、窓を開け放して遊戲をさせることにしてゐる。
此の間敎へた「カクレンボ」である。

カクレンボ　スルモノ　ヨツトイデ
ジヤンケンボンヨ　アイコデシヨ
モウイイカイ　マアダダヨ
モウイイカイ　マアダダヨ

モウイイカイ　モウイイヨ

子供達は、机や腰掛の下にもぐりこんでかくれるのである。
頭かくして尻かくさず、頭を机の下につつこんで、お尻はまる出しでも、すつかりかくれてしまつたと思つてゐる。
かくれたり、さがしたり、かはりばんこに子供達は倦きずに何回もやる。
オルガンを彈く私の方が倦きる程である。
雨の日の下校は大變な混雜である。雨具を探したり、着せたり、下駄箱がゴツタ返しである。
雨合羽を、着せて貰ひに來る子供が後から續いて來る。着せてやるのはよいが、いつまでも他に賴ることは善いことではない。
お友達同志で助け合つて着るとか、そのうちには自分で着るやうに指導しなければならない。

一人一人整列させておいて歸せてやるが、迎へに來た父兄達が、唯ボンヤリと見てゐるのは感心しないことである。自分の子供だけ世話をして、さつさと連れて歸る人もあるが、個人主義を遺憾なく發揮してゐる人のやうに思はれて氣持が惡るい。

一人の敎師が、六十人からの世話をしてゐる時などは、矢張り手傳つて欲しい氣持がする。

私は、且て受持つた子供の母親に感心させられたことがあつた。

五年生の時であつたらうか、矢張り父兄會の日であつた。始めて掃除をするので子供達は張り切つてゐるが、仕事はなかなか、はかどらないのである。父兄會の始まる時刻は切迫して來る。

と一人の父兄が、腰紐をほどいてたすきがけとなり、仕事を手傳はれたのである。手傳ふことは、敎育的に見て、よいかわるいかは別として、私は其の父兄の心意氣に感じたことを未だに忘れ得ない。

雨の日などは特にさうした感じが深いので、手傳つて貰はねばならない程の困難な仕事ではないが、それだけの父兄の氣持が欲しい。

子供達は、外套に足が生えたやうな恰好で歸つて行くのである。或は又洋傘から足が出たやうである。かうもりが歩いて行くのである。

○

午後から、にはかに降り出した日である。五時頃私は歸宅の道を急いでゐた。私の前を大きなかうもりが歩いてゐる。二三歩通り過ぎて行くと後から

「センセイ、センセイ。」

と呼ぶ。私はふり向くと一騎君である。

「センセイ、カウモリナイノ。」

と尋ねる。

「センセイはいらないのだ。停留所すぐそこだらう。」

一騎君は電車道を見ながら頷いてゐたが、私の濡れた洋服を見て、しきりに後の方を人待顔でみるのである。

「一騎君、どこに行くの。」

「オツカヒニイクノデス。オカアサントイクノデス。オカアサンマダコナイノ。」

思ふことを充分に言ひ現せない一騎君の氣持が、私にはすつかり解るのである。母親が後から來るから待つてゐて下さい。そしたら、自分はお母さんの傘に入るから自分の今さしてゐる傘を、先生に上げたいと言ふのである。私は目頭が熱くなつた。師弟愛とでも言ふのであらうか。入學して僅か二ケ月經つたばかりの子供が、自分の受持の先生が雨に濡れてゐるのを見て、自分の雨傘を貸さうとするまことの心には思はず泣かされてしまつたのである。

それ以來、一騎君の顔を見るたびに

「センセイ、カウモリナイノ。」

と尋ねたあの聲が響いて來る。

私は元來が濡れて歩くことは平氣なのである。濡れて歩いてゐると、頭から洗ひ清められるやうな氣持になる。みそぎなどと水をかぶることが流行してゐるが、天然水で私は十年も前からみそぎをしてゐるのである。

雨の中を驅け出しても濡れることには變りがない、だから私はいつもゆつくり濡れて歩くのである。

けれども、雨の中を濡れて歩いてゐる子供の姿は淋しい。」

子供にだけは、濡れて歩かせたくない。

子供と作品

エノホン

先週、「エノホン」のおけいこの時に畫かした、子供達の作品を見てゐると、お人形さんを畫いた繪が四五枚出て來た。

大變、形も色どりも上手に出來てゐたので、教室の後方の掲示板に貼つてやつた。明日子供達は見つけて大喜びをするであらう。お人形の好きな、光子さんの繪である。よく見てゐると、畫かれてゐるお人形さんの顔が、光子さんに似てゐるのである。

子供つて、大抵自分の顔とよく似た繪を畫くものだと氣がついた。さう思つて外のを見ると、皆それぞれ似てゐる。私は素晴しい發見をしたやうに嬉しくなつたのである。

自分の顔と似た繪を書く。似顔繪でもないのに實によく似てゐる。

大ざつぱに畫いたお人形さんではあるが、どこかに畫き手の特徴が現れてゐるのである。眼といひ、口元といひ不思議な程、個性がにじみ出てゐる。

子供は、無心になつて畫くから、そこには眞實なものが出て來るのであらうと考へた。

技巧もなければ、ごまかしもない、生一本の眞正直！ どんな繪を畫くにも眞正面からぶつつかつて行く勇敢さには驚かされるのである。

私はよく机間巡視をしながら、子供の作品を大體見ておくのであるが、後で黒板に掲示して鑑賞させると、「こんな上手な繪があつたかしら」と思ふやうな立派なものが出て來る。見落したわけでもないのであるが。

子供達はクレヨンでこつこつ塗りまくつて、遂々まとまつた繪を仕上げるのであるが、見てゐる時などは、何を畫いてゐるのか、又何を畫かうとしてゐるのか、はつ

きりしないのであるが、それがいつの間にか一つのまとまつた繪になり、說明させてみると成程と思はれる理由がそれぞれあるのである。

こんな繪か、と思つたものも、子供の說明をきいて、どれも皆意味のあるのに驚く。

コウサク

折紙の紙鐵砲を作らせた時である。手指の初步的練磨を圖る目的であつたから、出來上つた結果は餘り重視せずに、作り方を一生懸命に練習させたのであつた。

器用、不器用、丁寧であるとか粗末であるとかが、はつきり解つて來る。

最初は皆と一齊に作り始めた。途中は何回も說明を加へ、出來ないものに何度も說明をして敎へ、工程を追ひつかせては又一齊に作り始めるといふやうにして、結果を調べてみると、紙鐵砲にならなかつたものが二人出來たのである。此の二人は、一人で作らせるとどうしても紙鐵砲にならなかつた。二人を一所に集めて、私が側につい

てゐてやつと作らせたのである。紙鐵砲にならないのだから、上手に作らせやうなどは無理な注文である。

けれども丹念に敎へて作らせると終には出來てしまつた。二人の子供は大喜びであつた。又ほぐして作らせて見た。矢張り出來ない。さつきの喜びは束の間のことで今度はベソをかいてゐる。お友達に敎へられてやつと出來たが、それでも自分で作つた樣な喜び方である。

かういふ時、泣く子供が二三人必ず出來る。泣きじやくりながら作るのである。涙と鼻汁とをごつちやにして、色紙は濡れて色が手にうつつてゐる。見るからに可愛想である。

仕方がないので、なだめたりすかしたりして作らせる。大抵は半分以上こちらで手を貸してしまふ。

皆出來たので、紙鐵砲の兩側に赤い紙で圓を切拔かせて貼らせた。

方々からパーン、パーンと音がする、しまひには教室中一杯に音が擴がつた。

作つたものが、直に使ふことの出來る場合の子供達は、皆嬉しさうである。

作る前から、これをどう使つて遊ばうか、誰に上げやうかなどと考へて作り始めるのである。喜びに胸をふくらせながら、

工作の場合など、鋏の使ひ方を見ると、大抵子供達の器用、不器用さが解るものである。

もみぢのやうな小さい手で、とても上手に鋏を使ひこなしてゐるものもある。紙を切抜いたりすることが巧妙に出來るものも五六人はゐる。それと反對に、不器用な子供は鋏の握り方からまづ、うまく切れないのも無理はない。

要具の使ひ方は一番始めに、丁寧に指導すべきものである。指導されなかつた子供は、殆ど永久的に自己流で行つてしまふであらう。

子供達の作品は、大抵力相應のものが出來上る。よく家庭作業にすると、其の作品

は素晴しく立派なものとなつて來るが、私達は平素、子供の作品の程度が解つてゐるので、手が入つてゐるか否かが直ぐに解る。家庭作品を

「これは誰のですか。」

と名前がついてゐなかつたので尋ねて見たら、作者がゐなかつた。自分で作つたのでないので、記憶がなかつたのであらう。

綴り方

子供達の入學最初の綴方作品は、貴重なものである。

私は「昨日のこと」を皆で話し會ひをさせた。綴り方の始めは「話し方」から出發することが大切なのである。

こちらから釣り出すやうに仕向けて行くと、いくらでも話がつながり出て來る。

元康君と綾子さすと基子さんは、昨日一所に遊んだことを話したので、それを書い

て貰ふことにした。

一ノ一　觀世元康

ボクノウチデオトトイオザキサントオグラサンヤヒロセサントガツカウゴツコオシテアソビマシタ。ソレカラサヤウナラシテコンドハオシウジノオケイコシマシタ。ソウシテオヤツヲイタダイテカラオウチデウツシエヲシテアソビマシタ。

一ノ一　ヲザキ　アヤコ

オトトイヒロセサントフクイサントカンゼサンノウチエアソビニイキマシタソレデガツコウアソビヲシテアソビマシタ。ソレデヒロセサントワタクシトヲウチエカエリマシタ。ソレデウチデフウセンツキヲシテアソビマシタ。ソレデヲモシロイデシタ。ソレデオカアサントヨソエヲツカイニイキマシタ。

二人の作品をつき合はせてみると、昨日は五人の子供達が集まつて、種々な遊びをしたことを書いてゐるのであるが、どれもこれも事實の全體を書き盡してはゐない。

自分の最も印象的な、人や事物を書いてゐることに氣がつくのである。

自分のしたことや、みたことやきいたことを書くのであるが、どれもこれも皆書きつくすことは必要でないので、その中の一番印象的なものを書くことがよい。

二人の子供は、同じ日に同じ事をして遊んだのであるが、顔振れも、遊んだことがらも多少違つてゐる。違つてゐる事實を私は子供の印象の問題と考へた。

綴り方の最初に、最も印象的な部分だけを書く態度を持つてゐる子供達の、將來の作品が樂しめるやうになつて來た。

子供の作品を研究的に調べてみることは、興味も深いし、子供達の個性もよく解つて面白い。今私は研究錄を書いてゐるのではないので、唯、自分の學級の子供達が書いた、最初の綴り方といふ意味でとりあただけである。原文のまゝの方が、眞實の味く味はがある。話すことよりも、書くことが如何に苦しいものであるかは、作品を通じてよまれるのである。

知能總動員とでも言ふのか、自分の知つてゐる文字は、全部しぼり出して使つてゐる。

ミヤコさんの作品にはそれが見られる。

「木ノウ………トツテ木マシタ。」

となつてゐるが、子供達は皆、發音が同じであれば通用するのである。發音假名遣の問題も考へねばならないことと思ふ。

「キノウ」の「キ」は「木」であり「キ」はどこまでも「キ」の發音を持つもので通用するのである。

初步に於ては、オヤヲの區別や、イ、エ、ヱの使ひ分けなどは、問題の中心外なのであつて、綴り方に於ては兒童の生活指導が主眼であり、生活に即して物の見方、考へ方を適正に指導することが大切なのである。

私は子供達の最も記念すべき貴重な作品の一つとして取つておいたものの中から、

二點を取出して記錄して見た。

入學と退學

都會の學校には途中入學や退學が頻繁にある。これは教育的に見て決してよいことではない。父兄にとつても子供にとつても悲しいことに違ひない。

私だちにとつても、せつかくよく氣心も解つて來て、親しみが一層深くなつて來たものが、急に退學するといふことは、非常に淋しいことであり、悲しいことである。

退學しなければならなくなつた父兄が、突然學校に來て、その理由を悲しげに申し出られるのを見ると、私達もたまらない氣持になるのである。

「先生、宅が滿州に行くことになりましたので、一先づ里に歸ることになりました。」

と涙を浮かべながら言はれると、何と答へてよいか言葉もない。

「せつかくよく慣れたのに殘念ですね。」

私は明日からポツカリ、椅子が空くのを思ふと、齒の拔けたやうな侘びしさが沸き上つて來る。

「向かふに行つても、からだを丈夫にして、しつかり勉强しなさい。」

と頭をなでながら言ふと、隨分腕白で世話を燒かせた子供であつたが、じつと頭をうなだれて淋しさうにしてゐる。

それは、手鹽にかけて育てた子供を、奪はれて行くやうな悲しみである。

退學者のあつた後の教室は暗い。その子供が元氣な朗らかな子供であつたりすると尙更味氣なさが沸き出るのである。

子供達が二三人休んだりすると、張り合のないものであるが、退學の場合はもつと深刻なものがある。

入學は退學と違つて陽性である。然し子供の心には、前の學校の先生やお友達のこ

とが消えないで、心はそのことで一杯であらう。新しい學校の雰圍氣に慣れることや、先生の氣心を呑み込んだり、お友達を選擇したりすることは容易なことではない。

轉校して善くなる子供などは稀であつて、多くの場合は香しくない結果を見るものである。

途中から入學する子供には、何よりも早く學校の樣子を知らせることであり、先生やお友達に親しくなることである。

「今日は又一人お友達がふえましたよ。お名は山田時枝さんといひます。山田さんは前には〇〇國民學校にゐましたが、今度此の學校にお入りになりました。」

と紹介して名前を一同に言はせる。

「ヤマダ　トキエ　サン」

そして兩方とも「よろしく」とおじぎをさせる。

「山田さんが前から此の學校にゐたやうに皆で學校のやうすを敎へて上げませうね。」

と言つて、所屬の班の子供達に世話をさせるのである。

下駄箱や帽子掛、水呑場、便所等、子供達は新入學者を珍しがつて、取りまきながら方々案内して、親切に敎へる。

子供達は直ぐにお友達になつてしまふ。歸る時には既に遊びに行く約束をしてゐる子供もある。

退學は陰氣であるが、入學は陽氣である。

出張の日

「センセイ、イツテイラッシャイ。」

と言ふ。出張の日である。敎室の中の仕事や、運動場での遊びなどについて、こまごまと注意をし、仕事を與へ

「皆さん、靜かに大人しく勉强してゐて下さい。危ないことなどしないやうに、喧嘩してはいけませんよ。」

などと言ふと、

「オトナシクシテヰマス。」

と、口を揃へて言ふのである。全く可愛いものである。

「お土産を持つて來ますよ。靜かに待つていらつしやい。」

母親の氣持になる。六十人の子供を手放して行く敎師の心は、子供を留守居させて買物に行く母親の心と、少しも變りがない。

私達の出張は、大抵の場合、他の學校の參觀である。

他の學校の子供の樣子を見ると、敎師はまるで、母親同志が電車の中などで、子供達を見比べて見る氣持と同一心理になる。

こゝの子供は躾がよく行屆いてゐるとか、元氣があつてよく答へるとか、讀み方が

上手であるとか、常に自分の學級の子供と比較検討してゐるのである。
學校はどこの學校も殆ど同じやうな生活をする。
今頃、置いて來た子供達もお休時間で、遊んでゐることであらう。喧嘩などしてゐるものはないかな。泣いてゐるものはないかな、怪我などしないだらうかなどと思ひ出す。
さうすると、參觀などしてゐることが、とても意味ないことのやうに思はれて、早く歸校したくなつて來る。
生きてゐる六十の生命を、放り出して出張することは、教師の精神的な苦痛である。雨の降る日の出張などは尚更である。他の先生だつて、自分の責任範圍の學級の子供がゐるのであるから、なかなか、思ふやうに他の學級までの世話までは手が屆かない。
「センセイ、イツテイラツシャイ。」

と言ふ子供のことを想ふと、いとほしさが一層増すのであるが、
「オトナシクシテキマス。」
などといはれたら尚更、生みの親でなくても、頭をなでて
「おみやげ、何にしませうね。」
と言はざるを得なくなる。
全く子供は可愛いものである。
出張の翌日、早く學校に行つて、子供達の顔を見なければ安心出ない。
第一時の始めに
「昨日は大人しくおけいこしてゐましたか。」
と尋ねると
「センセイ、カツヒコチャンガケンクワシマシタ。」
「センセイ、キミツカクンガサワギマシタ。」

「センセイ、カヅヨシクンガ、オキヤウシツカラデテアソビマシタ。」
などと後から後から、澤山報告が出て來る。此の分ではどんなに騒いだか知れたもんではないと思ひながら、同僚に聞いて見ると、
「割に靜かでした。」
と言ふ。
「きみは本當に騒いだのかね。」
と呼び出してきいてみると、頭を横に振つて否定する。
「大人しくしてゐたのですね。」
「ウン。」
頭を下げる。
「おみやげを持つて來ますよ。」
と言つたことを思ひ出して、深呼吸をして氣持を落付けたのである。

先生のゐない教室で、仕事をしてゐる子供達は實際つまらないに違ひない。兩親のゐない家で留守番をしてゐる子供達が、つまらないのと思ひは同じことであらう。私の出張の翌日は、必ず出張先の學校の子供達のお話をしてやるのである。
子供達はおみやげ話とも知らずに熱心に聞いてゐる。

並んで登校

郷土を持たぬ子供は不幸である。祖國なきユダヤ國民は哀れであると同樣である。
子供達に郷土愛の心を植ゑつけたいと念願したのは數年前からのことであつた。
小市民としての愛市精神ではなく、日本國民としての郷土愛の精神である。
都市の子供には郷土愛の精神が稀薄である。
郷土愛は祖國防衛の鐵石の心となるのである。都市防衛が都市に住む人々の手で保

たれねばならぬとするならば、都市愛――鄕土愛の精神を强く植ゑつけなければならない。

今までの學校組織が、學校を中心に、漠然と集團してゐたに過ぎなかつたし、そして編成は生年月日を基礎にした年齡別組織であつたのである。

新しい學校組織は、學校を中心として、地域的に編成されなければならない。子供達の組織を地域的に編成し、その外廓として、父兄の組織がなければならない。學校――兒童――父兄が統一ある組織體でなければならない。

地域別に編成することは種々な點に於て敎育上有効である。

同じ區域から登校する子供達が、個々バラ〳〵に登校するのではなく、お互に誘ひ合つて、然もよく並んで來ることは、集團訓練の上から見ても大事なことである。

同じ學級であるならば尙更便宜が圖れるのである。下校の場合にも一所に歸宅出來る。途中で道草を食ふやうなものは忽ちに一掃されてしまふのである。

小年團の組織が地域的に班組織となり、町內會などの隣組式に編成されて來たが、それは少年團のみの仕事ではなく、國民學校の兒童組織そのものも地域班別の組織でなければならないのである。

大人の隣組に準じて、子供の隣組が出來なければならない。都市に於ては尙更大切なことである。都市の子供に鄕土愛を植ゑつける基礎は、此の地域班別の組織が根抵になるのである。自分達の生活してゐる場所――地域を愛する精神は、軈て祖國愛――愛國の精神に通ずるものである。

地域的に編成された子供達は、活動の一切が地域に置かれてゐるから、何をするにも便宜である。

登校するにも、下校するにも、學習をするにも、班が中心となる。

反面に、組織のなかつた兒童や父兄に組織づけをするのであるから、いろいろな困難な問題が起つて來るのは當然である。

職業などの相違から來る生活面の凸凹は、かうした集團的な生活訓練には大きな障害となつて來る。

登校前の集合時刻などは、常に問題となるのであるが、團體生活は個人的な考や行動で左右されてはならない。

少しの無理は忍んでも、團體の一員としての責務を果さなければならないのである。

小さい時から、かうした共同生活を實踐を通して訓練づけて行くことが、大切なことである。

少年團の組織は、三年生以上の子供達に限られてゐるが、私達は一年生にも地域的班別組織をした。

學級の子供が、七つの班に分れ座席も班中心に定めてある。下駄箱も班組織になつてゐるから、決して混雜をしないのである。登校の場合は、地域にある一年から六年までの子供が一團となつて。整列して登校するが、下校の場合は、學級だけの班別組

織で下校するのである。

このやうな班別組織が、新しい教育運營の基礎として、兒童と父兄が組織づけられ、地域的に集團生活をすることによつて、地域を愛好する精神が昂められ、軈ては鄕土愛――祖國愛の精神が培はれるのである。

學區を巡ぐる

毎月興亞奉公日は學區域内の巡視をすることになつてゐる。

子供達の地域に於ける生活狀況を視察するのである。二三の父兄に意見を徵したり、班長や組長に諮問をしてみたりして、生活の指導をする。

都市の子供達は、遊ぶ場所には惠まれないので、狹い横丁の路次とか、小さな空地を見つけて、それぞれ、廣さや場所の關係から工夫された遊びをしてゐる。

縄飛び、圓跳び、石けり、鬼ごつこなど、狹い所を利用して適當な遊戯や競技をしてゐるのは感心させられる。

私達が廻つて行くと、

「センセイ、センセイ。」

と今まで遊んでゐたのを中止して寄つて來る。

「危くないやうに、氣をつけて遊びなさい。」

と注意をすると

「ハイ。」

と答へて、又遊戯や競技を始めるのである。

途中で會ふと、ニコ〳〵笑ひながら

「センセイ、サヨウナラ。」

とおじぎをして去つて行く。

「會つたばかりで、さやうならはおかしいですね。」

などと冗談をいふと、頭をかいて驅けて行つてしまふのである。

朝會ふと

「オハヤウゴザイマス。」

だが、午後會ふと

「センセイ、サヤウナラ。」

なのである。中には一年生などは、午後に會つても

「センセイ、オハヤウゴザイマス。」

などと挨拶をして

「アツ、イケナイ、センセイ、サヤウナラ。」

頭をかきながら、狼狽して言ひ直しをするものもある。

私がいつも通る道には、私の受持つてゐる子供達が多く住んでゐる。

歸る頃には大抵横丁で遊んでゐる。誰か一人私の姿を見つけると、
「ア、ワタナベセンセイ、センセイガイラツシヤツタ。」
と大騷ぎで驅けて來る。
「センセイ、サヤウナラ。」
「何をして遊んでゐましたかね。」
と一言尋ねると、答へもしないで嬉しさうにニコニコ笑ふ。さうして私が角を曲がるまでは、
「センセイ、サヤウナラ。」
「サヤウナラ。」
を繰返して見送るのである。時には停留所までついて來て、
「オミヤゲ、オミヤゲ。」
などといひながら、私の背中を叩いてキヤツ／＼騷いで見送ることもある。

私の乘つた電車が見えなくなるまで、子供達は手を振つて見送る。子供達の姿が段々小さくなるのを見てゐると、目頭が熱くなつて來る。
時々、子供が大きな風呂敷を下げて來るのに會ふことがある。
「どこへ行つて來ましたか。」
と尋ねると
「オツカヒニイツテキマシタ。」
と風呂敷を見せながら答へる。
「おりこうさんですね。」
「勇さんのやうですよ。」
と賞めてやると、とても嬉しさうである。子供はきつとお家へ歸ると、息をはずませながら、お母さんに報告するであらう。
「オカアサン、トチユウデ、ワタナベセンセイニアヒマシタヨ。ボク　センセイニホ

メラレタ。」

良いお母さんであつたなら、どんなに忙しくとも

「それはよかつたですね。おつかひをするとほめられるのですよ。又おつかひして下さいね。」

と答へて呉れるであらう。子供は明日も催促しておつかひするに違ひない。

家が近かつたら、學年、學級の區別なく、立寄つて

「お宅のお子さん、感心ですね。ヨイコドモですね。」

と賞めてやつたら母も子もどんなに嬉しく、勵みがついて來ることであらう。

惡い遊びをしてゐたら、子供達を止めるのは勿論であるが、お家の方にも立寄つて一寸注意をすることが大切なことである。

「お宅のお子さん、危ない遊びをしてゐましたが、ご注意願ひます。」

母親は必ず眞劍に注意するであらう。子供達も、氣をつけるやうになることであらう。

私は巡視をしながら、斯ふ考へた。

子供隣組常會

「常會を開くから來て下さい。」と言ふので、私は自分の分團の隣組常會に行つて見たのである。班長の森君の家で開いてゐた。先づ玄關に入つて見て感心したのは、下駄や靴がきちんと並べられてゐたことである。二階でやつてゐると言ふが、實にしんと靜まりかへつてゐる。私がギシリギシリと階段をきしませながら上つて行くと、一年生から六年生までの子供達が、男も女も仲良く、きちんと靜座をしてゐる。班長の森君が「先生に對して「禮」」

と指揮をとると、皆一齊に姿勢を正しておじぎをする。私は二度感心させられてしま

つた。

班長を中心として、他の班員達は、皆眞劍に相談し合つてゐた。五年生の阪本君が

「班長さんや組長さんは、もつと嚴しくどし／＼やつて下さい。」

と希望意見を出してゐたところである。

「まだ外にありませんか。」

班長の森君はキビ／＼と司會をしてゐる。

「道路につばをする大人の人があるが、あれは止めた方がいゝです。」

六年生の石城さんが言ふ。

「さうですね、道路につばをすることは惡いことです、見つけたら、大人の人でもよいから注意することにしませう。」

「まだ外にありませんか。」

前から話は進められてゐたと見えて、言ひつくされたのか餘り話も出て來ない。

「それでは先生がお見えになられたから、何かお話をしていたゞきませう。」

森君が言ふので私は常會の開き方や、常會の仕事などについて簡單に話して、最後に感心したことを附加へておいたのである。

「先生は感心したことが三つあります。先づ第一に、はきもののぬぎ方が大變よろしい。第二は、非常に靜肅にやつてゐたこと、第三は司會者の態度も、班員の態度も熱心で大層よい。此の三つを感心しました。」

と賞めておいた。

事實立派な常會であつたのである。指導者が良いとその班は非常に良くなつて來る。それは目立つて立派になつて來る。私は指導者訓練の重要さを子供を通してしみじみ考へさせられた。

常會は大人でも仲々うまくいかないものである。然し子供達には、徹底的に訓練して行きたい。今の子供達が、かうして熱心に常會を開いて行つたなら、此の

子供達が軈て街や村の大人になつた曉は、立派な仕事をして行くことであらう。

時局と子供

現在の國民學校の子供は、皆支那事變が始まつてからの者達である。

私は、事變五周年といふよりも、子供達の育つた姿を見た時の方が、より切實な感じに打たれるのである。

時間や空間の觀念に乏しい教育を經た私達には、現實に實在せる物を對象として考へないと、明確にならない場合がある。

一年から六年までの子供の姿を見ると、現在の一年生が六年生の姿になるまで……育つ間、日本は戰ひを鬪つて來たのである。

想へば長い間であつたが、其の間國家の生命である子供達は大きく育つたけれど、

亭々と聳える巨大な樹木
清き泉の水を吸つて育つ若木
青々した若葉は
暑熱に喘へぐ人々に憩ひの一瞬を與へるであらう。
長い間の丹精の結果
樹々は山々の彼方にすく〳〵と伸びて
大自然に美を添へ、故國を護る。
然しやがて訪れるであらう、冷い風雨は
試錬の嵐は、
遂に 樹木に、若木に、そして若葉に
鬪ひをいどみ
樹々は色づき、枯渇し、そして散つて行くのだ。

大人の私達はどうであつたらうか。
五年間闘ひつづけたとは思はれない、毎日の生活振りであつたのではなからうか。けれども、五年前と五年後の私達の生活には、私達の觀念には、私達の志向には、可成りの變革が起つて來た。
物の觀方も考へ方もすつかり變つてしまつた。
五年前の自分の姿はどんなものであつたかを、想ひ起すことすら困難で、今の私には明日へ生き拔くことの方が、より切實な問題である。
闘ひ拔くことは生き拔くことだ。
流石は支那事變最中の國民教育を受けた子供達だけあつて、闘ひ拔き、生き拔くといふ逞しい意欲が燃えてゐる。
子供達の心の中にも、祖國日本の眼前には、未曾有の危局が迫りつゝあることの意識が、深く深く喰ひ入つてゐる。

自分達の力で出來ることは何でもしやう、お國のためなら、　天皇陛下　の御爲なら喜んで何でもやり、生命を捧げ奉らんとの念願は、たぎりあふれてゐるのである。物の節約や、感謝の氣持、奉公の精神等が彼等の生活全面に表はれてゐる。

貯蓄心も培はれた。節約の精神も芽生えた。

そして無駄の無い生活が、設計せられて來てゐる。

遊びの種類も餘程違つて來てゐる。兵隊ゴツコや騎馬戰のやうな勇壯活潑なものが盛になつて來た。

戰爭のことや、化學兵器のことを畫いた本が非常に讀まれ出した。

飛行機や、戰車軍艦などの種類や名稱や性能などのくはしさは、大人の到底及ぶべくもないものがある。

模型飛行機の製作熱が物凄いまでに昂まつて來た。空地といふ空地では、作りあげた飛行機を飛ばして、まるで秋のとんぼの襲來のやうである。

一と頃よりは、落し物も少なくなつて來た。學用品も地味なものが多くなつて來た。子供達の衣服にも、スフの光澤がはつきり解るやうになつて來た。

斯くて事變の影響は、ヒタ〳〵と子供達の生活の上に、樣々な形で現れて來てゐる。

或る日一年生が袋を私の所に持つて來た。

「センセイ、ヲレクギデス。ケンノウシテクダサイ。」

見ると菓子袋に一杯あつた。

「よく拾ひましたね。大へんよいことをしました。」

と賞めたら、翌日から毎日四五人はきまつて、折釘を二三本づつ持つて來るやうになつた。數でこなせる學校のやうな所では、集めるとなると忽ちである。皇軍將兵に對する慰問狀などは、一日で千數百通も出來るのである。子供達の繪や文が大層喜んでいたゞけるといふので、學校でも數回發送した。一年生も全能力を傾注して繪と文とを書いて屆けた。發表能力の未だ發達しない子供達の繪や文が、戰地の兵隊さん達を

喜ばせることを想ふ時、私達はまごころこめて書いたのである。

紙屑を捨てずに整理するやうになつたら、毎日紙が山のやうにたまつて來た。

ドングリを拾つて來るものが出て來た。ドングリからアルコールがとれるといふことで子供達は毎日ドングリ取りに夢中である。もと〳〵ドングリ取りは、子供達に興味のあることであつたが、今度は目的的になつたので、一層勵みがついたと見えて、忽ちドングリの山が出來てしまつた。

事變勃發以來、子供達の生活面にも、實に種々な現象を見るやうになつて來た。

時局の波動は子供達にも波及して來てゐる。そしてそれが強く深く身にしみて來てゐるのである。

時局の反映は子供達の日用語の上にまで現れて來た。…

殺伐極まる言葉がとび出て來る。

「ヤツチマヘ、ヤツチマヘ。」

「ブツタギレー。」

「テイメイ。」

「コンチキシヤウ。」

「バカヤラウ、キヲツケロ。」

日本のどこの言葉だらうと思はれるやうなすごい言葉が、標準語を以て誇つてゐる帝都の子供達の口から漏れるのである。

こんな言葉を一體いつの間に子供達は覺えるのであらうか。普通の家庭でも使はないであらうし、學校では勿論、どこを探しても見つからない言葉なのである。

「ヨミカタ」には「ラジオノコトバ」といふ教材があつて、

キタナイコトバヲツカハナクナツタラ、日本中ガトテモヨイキモチニナルデアラウ。と教へてゐる。

日本語は正しいきれいな言葉なのである。せめて國民學校の子供達からだけは、汚

ない言葉は一掃したいものである。

かうした言葉は時局が生んだのではないが、人の心が落付かない、不安定な生活となり、希望も持てないやうな場合には、兎角心がすさんできて、こんな角ばつた言葉も巷の中から強く響いて來るのであらう。

子供達の生活用語には事變を通した影響の言葉が多いのである。

誰に聞いたか、

「〇〇君の心臟はトーチカだよ。」

幅跳びなどをすると

「クリークとびだ。」

などと言ふのである。

物の形容にも、昔は巨像の如しなどと言つた所は、今日の子供の綴方作品には、タンクの如しなどと變つて來てゐる。

時局は子供達の生活の中に全面的に侵透してゐるのである。

遊びの中にも、言葉のうちにも衣食住の一切、物の觀方や考へ方に至るまで、新しい時代を劃して新時代の意識が作りあげられつゝある。

今の子供達が十年經つたらどんなになるかを想ふ時、一日も早く國策の向かふ所を見透して、國家が必要とする人間を鍛えあげねばならないのである。

配給と運動靴

時局の波は學校の中までしみこんで來た。子供達への靴や靴下、洋服や運動シャツなど一切を學校で配給をするやうになつたのである。私達は從來のやうな鞭とチョークの先生ではあり得なくなつて來た。

學校事務や行事の一つ一つが、時局の推移を如實に具現して來てゐる。

由來學校ほど、國策の動向が明確に反映する所はない。特に思想―文化方面のことは忽ちにして普及されてしまふのである。

自由主義や個人主義はよくないことで、統制主義や全體主義でなければならないといふことになれば、學校生活の全面が、根抵より批判再検討を加へられ、即日公布發效といつた有様である。昨日と今日とは截然として區別されてしまふのである。

一列新體制の標語が街頭や車內などに貼り出されると、學校の生活の一切は一列新體制となる。便所、下駄箱、水呑み場などは忽ちにして長蛇の如き體列が出來る。而もそれは徹底的である。

けれども多くの場合、一般社會の方は遙かに遲れて、而もなか／＼實行されないのが普通なのであるから、此處に教育の惱みが起つて來る。學校の中では直に徹底されるが、家庭や社會に於ては徹底されてゐない。子供達は自然と陰陽二途の使ひ分けをしなければならなくなるのである。

陰陽二途の使ひ方などは、大人の社會が良くならない中は、到底子供達の世界から除き去ることは出來ない。

ごまかしや方便、一時のがれなどいふ、いまわしい事柄が子供達の生活の中に惡魔のやうに棲みこんでしまふのである。

國家の生命である子供の教育は、國を擧げて努力しない限り、決して徹底されるものではない。國民の一人々々が皆教育者、先輩は皆後輩を教育するといふ精神に目覺めない中は、徹底するものではない。

「闇取引」などいふ嫌な言葉が學校の中まで侵略して來てゐる。

子供達が運動場で遊んでゐて、一人が不正な行爲でもすると

「おい君、闇はよせよ。」

と皆が言ふ。不正を行つた子供は顏を赤らめて引退るより外はないのである。そして二度と不正なことが行はれなくなるが、大人の社會では次から次へと跡を絕たないの

である。

「おい君、闇はよせよ。」

と子供達のやうに、皆が寄つてたかつてせめなければ根絶出來ないことであらう。道徳の國日本が白晝公然と不正行爲をして闇取引や買漁り、買溜めなどをすることは、國民道徳の衰退を意味するばかりでなく、國家の恥辱なのである。

運動靴が一時街頭から姿を消して、子供達を非常に困らせたことがあつた。

父兄達は、次から次へと傳へ聞いて、買ひ求めるのに東奔西走したものであつた。

買つて三日目にはボロ〳〵に破れてしまつたといふ話も、毎日のやうに聞かされたものである。

運動靴饑饉は、忽ちにして子供達を洗足にしてしまつた。

今まではいてゐた子供達も、靴の大事なことが解つたものと見えて、はかずにしまつておくものが多くなつて來た。

靴に關する笑へないナンセンスが、そこゝに起つた。

朝會の時、運動靴を持つて前へ列へをしてゐる子供が、目立つて多くなつて來た。

教室の机の下に、運動靴をきちんと揃へておく子供達が多くなつて來た。

靴を兩手に持つたまゝ、便所に行く子供が現れて來た。

靴をランドセルの中にしまつておいた子供もあつた。

學校でも家庭でも餘程、靴の大事なことや物の大切にしなければならないことを、徹底的に説教したものと見える。

遂に子供達は靴を、神の如く崇め尊ぶやうになつたのである。

運動靴であれば、どんなものでも手に入つたらよい方で、七文半をはくものが十文の靴をはいてバツタ〳〵音を立てながら、歩きにくさうにしてゐる一年生なども見られた。

それが學校を通じて配給されるやうになると、段々子供達も洗足のものもなくな

り、足に合はぬ運動靴をはいてゐる子供も見られなくなつて來た。
學校でも、子供の文數一覽表を作成しておかなければならなくなつて來た。
この一覽表によつて抽籤で順々に配給するのである。
子供達から金を集めて靴を買ふのである。早い話は今までの商人のやる仕事が、そのまゝ教師の仕事に移つて來たのである。
その爲に學校では、配給係も一人作らなければならなくなつて來た。
配給者は靴を持つて來て、金を貰つて歸るだけである。一切の雜務は皆教師の方に負はされて來たのである。
仕事は苦痛ではないが、そのために大事な仕事の方が、どうしてもおろそこになつて來ることがある。
學校の仕事は事變以來非常に多くなつて來た。そして教員は非常に少なくなり、缺員があつて補充がつかず、遂に學級を合併して、一人の教師が八十人も九十人も受持

つ有樣である。教師の過勞は明日の教育能率に影響を及すのではあるまいか。
「今度は運動靴を配給しますよ。」
と言ふと、子供達はワーツとばかり歡聲を張り上げて喜ぶのである。
子供達の喜ぶ姿を見ると、一切の苦痛も不安も消しとんでしまふ私達である。
抽籤を始める。子供達は報國債券の幸運を夢見る如くに籤を引くのである。
當つた子供は飛び上つて喜ぶ。當て損ねた子供達は、ガツカリ力を落してしまふ。
何しろ昔最も烈しかつた入學率よりも割合がひどく、十人に一人の割で配給になる。當る方が餘程、籤運の強いものであらう。
けれども一年も經つてしまふと、どうやら、どの子供達にも一應は配給濟みになるので、一と頃の父兄や子供達の苦惱も、一掃されたことは何よりなことである。
然もどの子供も皆同じ靴を穿き、苦しみも樂しみも、幸不幸共に均等であることが教育上からみても寧ろ有難いことである。

國民皆勞、皆苦、皆食——等國民である限りは、地位も門閥も階級も一切かなぐり捨てて、等しく一國民として苦しみ且つ働かねばならない。

今日はそれを必然たらしめてゐる。

國民の中から、闇取引などいふ嫌な事實を抹殺出來るなら、學校は配給機構の中心となつて、國民の道德心に訴へ、せめて子供の世界にだけは侵略出來ぬやうにしたいものである。

子供のたより

子供達と暫らく離れた生活をすると退屈してしまつて、無精に學校や子供達が懐しくなつて來る。

別段の用もないのに學校に行つて、ボンヤリ校舍や校庭を逍つてみるのである。

子供達のゐない學校は、ガランとして侘びしいものである。

運動場の隅に、持主から忘れられたやうに下駄が片一方、雨露にさらされてゐるのも靜寂感が深い。

梧桐の葉かげでさつきからミンミン蟬が鳴いてゐる。

子供達がゐないので、安心しきつて鳴いてゐるやうにも思はれる。

蟬の聲は、一層學校をして閑寂たらしめる。狀箱の中には、方々に散つた子供達から便りが來てゐる。

父と共に生家に歸省したもの、母の里方を訪れたもの、溫泉宿に出かけたもの、海水浴に行つたもの……等の子供達が行先々からの便りが一杯屆いてゐる。

中には自分の家から「元氣でゐます」との便りも見える。

私は、それ等を一枚一枚丹念に讀んでみた。葉書の主を想ひ起して思はず微笑が沸き出て來る。

あの腕白者の鳥澤君が眞面目な書き振りで、
「センセイオゲンキデスカ。ボクモゲンキデス。マイニチセミトリヲシテヰマス。十ピキトリマシタ。ハヤクガクカウヘイキタイデス。センセイ　サヤウナラ。」
　葉山の別莊へ行つた元康君は
「センセイオカワリハアリマセンカ、ボクモゲンキデス。八日ニハヤマニキマシタ。ウチノマヘハスグウミデス。ハレタ日ハフジ山ヤエノシマガハツキリミエマス。オアソビニイラツシャイマセ。」
などと書いてある。
　さだ子さんの
「センセイ、コンニチハ、オカワリモゴザイマセンカ。ワタクシハアタマニデキモノガデキタノデマイニチ赤十字ヘイツテヲリマス。ガクカウガハジマルマデニナホシタイトオモヒマス。センセイオカラダヲタイセツニシテクダサイ。センセイ、サヤウナ

ラ。」
などと近況を知らせてある。
　どんなできものかしら、痛むのかな、などと思つて一日も早く癒るやう心から祈つてあげた。
　惠一君が田舍から葉書をくれた。
「センセイ、ヰナカハトテモオモシロイデス。ボクハマイニチハダカデ、サカナトリヲシテヰマス。スコシ川デオヨゲルヤウニナリマシタ。セナカガクロクナリマシタ。サヤウナラ。」
　などと田舍の樣子や、生活の一端を書いてゐる。
　小堀で魚取りをした少年時代を想起して、思はず鄕愁の念にかられてしまつた。祖先の墳墓の地、鄕里にも歸省してみたかつたが、時局の緊迫は、私をして東京の地を一歩も離れ難いものに思はしめたのである。今となつて見れば、せめて一週間位

歸省して、少年の頃の思ひ出を、味はつて來ることもよかつたと思ひ返へされた。

子供達の便りの中には、切れ切れの言葉を通して、其の地方地方の模様が知らされてゐる。繪葉書である場合は、直ぐに其の様子が解る。

私は子供達の便りは大抵保存しておいて、九月の始めには讀んで聞かせたり、繪葉書を展覧させたりするのである。

惠一君は、背中が黒くなつたと報告して來てゐる。七月の末に、黒ン坊大會をすると云つて別れたが、そのためであらう。きつと、黒ン坊で一番にならうと、一生懸命背中をやいてゐるに違ひない。

惠一君は、元々相當黒いのだから、きつと一番になるだらうなどと、顔や姿を思ひ出して考へてみた。

病氣をして寢てゐるなどの便りはなかつたが、九月になつて調べてみると、大抵は數人位風邪を引いたとか、腹をこはしたとかなどで、二三日寢た子供達がゐる。

今年は、そんな子供はないだらうなどと考へてみた。

七月には元氣一杯に別れたが、八月の僅か一ケ月ばかりの間に、様々な境遇の變化が起つてゐるものである。

八月に寢ついて、九月になつても顔が見えないなどといふのは、とても悲しいものである。

中には休中に轉居してしまふ人もある。

或は父親と死別したとか、母親を失つたとか、時には交通事故のために遂に姿を見ることが出來なくなつたなどの悲しい事實もある。

私は一人一人の顔を思ひ浮かべてみた。

「あの子は元氣だらうなあ。」

「この子は何をしてゐるかしら。」

などと、取とめもなく思ひめぐらせてみると、一日も早く子供達と會つてみたくなる。

十二月八日

私達は、早朝に家を出て分擔地區を巡視してゐると、突然けたたましい號外の鈴の音が早曉の空氣を振動した。

朝遲い商店街も、此の物音に俄かに起き始めた。

「號外！　號外！」

「戰爭だ、戰爭開始！」

私達はハッと胸をつかれたやうな衝動に驅られた。

「帝國陸海軍は、八日未明西太平洋に於て、米英軍と戰鬪狀態に入れり。」

との第一報を耳にした時、街中は方々に人々の黒山を作つてゐた。

どの顏を見ても、何かしら憂鬱を吹飛ばした晴々しい顏をしてゐた。

山々を護る樹々の海は
若葉の衣をかなぐり捨てて
成長への努力と結實の苦心を白雪の下に
潜めて
やがて來るべき春への新生に
ひたすらなる力の蓄積をなしつゝ
芽生え
若葉となり
そして美はしき花を咲かす。
山々の雪は未だ消えざるも
その下にむく／＼と燃上がる力を
じつと押へて近づく春を待つてゐる。

來たるべきものが遂に來たのだ。さあ本物の戰爭はこれからだ。がつちり腕を組んで、宿敵米英を叩きつけてやらう。こんな氣持が人々の心の中に沸起つたのである。

長い間敵性國家の存在を知りながら、それを横目に見て、かいらいである蔣介石を相手に、戰はねばならなかつた四年半の、矛盾した割切れない氣持に押しひしがれたやうな生活であつたが、今それは完全に拂拭されて、眞實の敵米英に向かふことになつたのであるから、私達國民の感激は一入である。

此の日こそ私達の心の中に日本人たるの自覺と　天皇陛下の大御稜威の下に生まれ育つことの出來た感激と感謝の念、大東亞建設の崇高なる聖業完遂の爲に挺身せんとする氣持にうたれたのである。

道行く一人一人、知ると知らざるとを問はず、同胞愛の心と心とのつながりを感じたのである。

私達は、馳やる心を押靜めながら、子供達の集合所を巡視した。

寒さも急に感じなくなつた。ぐつと臍の邊りに緊張が加はり、燃え上がる國民的情熱に、足の運びも輕くなるのを覺えた。

「センセイ、オ早ヨウゴザイマス。」

「オ早ヨウゴザイマス。」

子供も常になく元氣が溢れてゐるやうである。

高速度地下鐵道の構内側に屯する子供達の顏には、時代を背負ふ逞しい氣力がみなぎつてゐる。

班長の號令で一同は整列してゐた。私はたまらない氣持で、街頭指導を始めたのである。

「皆さん、今朝の號外を知つてゐますか。」

「シツテキマス。六時ノラジオデキキマシタ。」

「アメリカヤイギリストイクサヲハジメタノデス。」

「オトウサンニキキマシタ。」

などと交々答へて呉れる。

「さうです。よく知つてゐましたね。皆さんはどんなことがあつても、驚いてはいけません。いつもと同じやうに、しつかり勉强しませうね。」

「ハイ」

と一齊に手を擧げる。私達は子供の隊列と共に學校に向かつた。方々の横町から子供達の隊列が、陸續と學校さしてつめかけて來る。

「オ早ヨウ。」

「オ早ヨウ。」

お互の挨拶も交はされる。どの顏にもいよいよ始まつたといふ色が看視される。私達も同僚と會ふ毎に、

「始まつたね。いよいよやらうぜ。」

「機會が來たね。がんばるぞ。」

などと力強い挨拶が交はされる。

常よりも三四十分早く出勤した私達の間には、火もない職員室で、今朝の出來事の話が沸騰した。

西太平洋といふ言葉は、私達にはピンと來なかつた。早速地圖を掛けて話がはづむ。何れもひと角の總參謀、總指揮官らしい態度と口調で、思ひ思ひの所見を吐露し合つてゐる。どの話も誰の意見も、今日は一應尤らしく聞かれるのである。ラジオはひつきりなしに軍歌を放送して、私達の國民的情熱をそゝらずにはおかない。日頃は話の圏外に立つ女の先生達も、皆この渦中に入つて聞耳を立ててゐる。

校長の顏色は一段と緊張味を加へ、一校の重責を擔ふ頼もしさが溢れてゐる。

間もなく、朝會は緊張味を一杯はらんで行はれた。當番の先生の指揮も、非常に力强さがこもつてゐる。子供達も眞劍味が漂ふ。晴れ渡つた寒天高く千數百の子供達の

聲が響く。

私達は感激と緊張とをもつて教室へ入つた。一年生にも、今日のたゞならぬ周圍の空氣はひしひしと感ずるのであらう。戰爭の話の聞きかじりも話題になつてゐる。

「ニツポンノカイグンハツヨインダヨ。」

「ボクハリクグンニナルンダ。」

などと話がはづむ。

「ワタシ大キクナツタラカンゴフニナルワ。」

女の子も日頃の希望を話し合つてゐる。

日本の强味を私は今更ながら發見し得たやうな氣がした。

授業は平素の如く進められて行つた。突然非常召集の合圖の鐘が鳴つた。サイレンは直に停止されたのである。私達は子供に仕事を與へて、職員室に集まつた。

校長は嚴かに今後時々非常召集を行ふ旨を述べられ、爾後サイレンの合圖を停止す

ることになつたと傳へられた。

そして

「只今、ラジオ放送によれば、我が軍は上海に入港中の英艦ペテレル號を撃沈、米艦ウェーク號を拿捕したさうであります。」

私達一同は餘りにも戰果の大きいことゝ、その素早さに驚いて、直ぐには言葉も出ないで、お互に顔を見合はせてゐるばかりであつた。

「ウーム。」

「ホー、ホー。」

しばらく經つてから

「すごいなあ！」

「萬歳！　萬歳！　萬歳！」

と聲が出た程であつた。

私達は、一齊に教室へ走つた。そしてこの喜び、此の感激を、子供達に傳へたのである。

「サア、ミナサンニスバラシイオミヤゲヲアゲマスヨ。」

息をはづませて語る先生の樣子を見た子供達は、どんなお土産かしらと首を傾げてゐる。

「日本は今アメリカやイギリスと戰爭をはじめましたね。始めるとまもなく、もう敵の軍艦をやつつけてしまいましたよ。」

「ヘーイ、ホントデスカ。」

などと質問やら驚きあきれたやうな聲が、方々の座席から起つた。

「上海といふところでアメリカの軍艦をブン捕つたほかに、イギリスの軍艦をうちしづめました。」

子供達は思はず

「ワーツ」

といふ叫び聲をあげた。拍手も起つた。國民的感激の堝の中に入つてしまつたのである。

間もなく終業の鐘が鳴つた。運動場へ出た私達は、子供達の運動を看視しながら大空を眺めて、空襲の場合を豫想して種々と語り合つてゐた。

學校の外から又號外の鈴の音が聞え出した。ラジオは續々と放送をして絕え間がない。

「大詔が渙發されたさうだ。」

「いよ／＼本式になつたね。米英何ものぞ。一世紀に亘る暴壓を叩きつける時機が來たのだ。」

などと私達の間に怒號が沸き起つたのである。たとへ五十年續かうが、百年續かうがやりぬかねばならないとの決意が、いよ／＼堅められた。十一時五十分頃大詔奉讀

の行はれることをラジオは放送してゐる、私達は再び職員集合を行ひ、大詔奉讀の際、如何なる方法で拜聽し奉るかを協議し合つた。

議は忽ち決して、運動場に集合することになつた。私は合圖を今や遲しと待ちながら授業を繼續した。

十一時五十分集合合圖が鳴つた。各出入口から靜肅に運動場に整列した。千數百の子供の視線は、一樣に擴聲器に向けて注がれ、耳は一語も聞き漏らすまいと緊張した。スキツチは入れられ、ジジジジと鳴つてゐる。

聽き覺えのある中村放送員(報道課長)の感激的な聲を、電波を通じて接受することが出來た。萬物寂として聲なく、唯聞えるものは一億蒼生の方途をお示し遊ばされる天皇陛下の御聖旨のみである。

天佑ヲ保有シ……

嗚呼遂に聖斷は下されたのである。私達一億國民は愈々東亞建設の大業翼贊のため

粉骨碎身、聖業完遂を期して挺身するのである。

心はすがすがしい日本晴れである。

子供達にも、はつきりと、米英を敵視して對敵意識を高揚することが出來るのである。私達は日米交渉途中の、あのモヤモヤした空氣の中で米英に對する態度を明らかにすることの出來なかつた心のわだかまりを、今こそ思ひ切つて心の底からぶちまけることが出來るのである。私達は元氣づき、仕事の上にも活氣を呈して來たのである。日本人は今日の日を永久に忘れないであらう。歴史は今日から新しく發展することになつたのである。

宿敵米英を相手に、アジア民族を米英の一世紀に亘る暴壓、搾取等の桎梏から解放する爲に、今日から聖戰の矛を取つて立つことが出來るのである。

今日よりかへりみなくて　大君の
しこのみ楯といで立つわれは

和歌の意味も、本當にその眞髓に觸れることが出來たのである。日本人は何百年、何千年もの間此の精神で戰ひつゞけたからこそ、このやうな生成發展の日本の姿を仰ぎみることが出來たのである。

大詔奉讀につゞいて、此の難局に立ち聖業完遂の爲奮鬪してゐられる東條首相の「大詔を奉戴して」との挨拶も放送された。

力强い一語一語に接した時、女の先生の中には、感極まつて涙を流してゐる人もあつた。

何と頼もしい力强い、そして落付いた聲であらうか。

今將に日本は世界の二大强國を相手にまはして、戰ひを鬪ひ續けてゐるのである。

私達は等しく

「此のお方がゐられる限りは大丈夫だ。」

「天皇陛下の御稜威があらせられる。」

としみ〳〵思ひ、安心しきつたのである。

けれども常に依頼心ばかり強くしてはならない。今日よりは、しこのみたてとなつて一人一人が戰士となるのである。

子供達にも、今日からの心構えを話し、我が儘を言つたり、好き嫌ひを言つたりしないやうに注意を與へ、安心して學業にいそしむやう諭して歸宅させた。

そして一朝事ある場合に對處して、作業服に身を堅め、脚絆を卷いて支度を整へ、待機することにしたのである。

學校の二階に上つて窓から澁谷驛附近を展望すると、この世紀の大業決行の前とは思はれない物靜かさである。

然し心を落つけて聞けば、その靜かさの奥底には、歴史を轉換させる世紀の炬火が燃えさかつてゐることが、ひしひしと感じられる。

ラジオ放送は、次々と戰果を報じて絶え間がない。

「帝國海軍は本八日未明、ハワイ方面の米國艦隊並に航空兵力に對し決死的大空襲を敢行せり。」

ホノルルが猛爆蒙をつて大火災を起してゐるとか、眞珠灣を攻撃したとか、アメリカ大陸に敵前上陸を敢行したなどと耳に入つて來る。居ても起つてもゐられない程戰果は矢繼早やに報道されて來るのである。

暮れ易い冬の一日である。感激的な、歴史を劃する八日の日も薄暗くなつて來た。敵機は一機も近づけないが、警戒管制を布くとのことで街々は暗かつた。

私達は歸途、始めて夕刊により、米英戰の全貌を知ることが出來たのである。香港に新嘉坡に布哇、比島、馬來半島と展開された此の雄大な作戰は、敵味方共に唯々驚くの外はないのである。

四年半も支那事變で戰つた日本の「どこにこのやうな力が潛んでゐたのであらうか。

私達は今こそ此の偉大なる日本の底力に、日本獨特の精神に頭を垂れて感謝しなけれ